
TSF孕ませ合同誌
TSF孕ませ
Anthology
R-18
Adult Only



目次

まえがき……005

【漫画】み皮……006

【漫画】ドブロッキィ……012

【小説】来宮悠里……016

【漫画】新川豊一……024

【小説】このざま……038

【漫画】ねおしの……044

【漫画】温野りょく（SS：伊巻てん）……048

【小説】くずほし……054

【漫画】カップちゃん……064

あとがき……072

性別が男から女へと変わり、あろうことか子を孕んでしまう――。
二つの大きな変化が引き起こす、物語の結末とは。



天才魔術師の処分方法

み皮


ボクに何をするつもりだ！
!?
「女」になってもらうのさ
女の魔術師どもは全部捕まえて消費してしまったからな
女がいないなら男の魔術師を使えばいい
元の体には二度と戻れないがなに心配することはない


10日経過
きちんと子宮ができているな
立派な宿主になれるぞ
なんで男なのに
こんな胸が膨らんでっ…
子宮が作られてるっ…
「女」にされてるんだ…！
人間の肉体を作り変えるなんて
魔術は聞いたこともない
元に戻れるのか…？
何だそれは…
これは俺が作った魔法生物の卵でな
女の胎内で孵化し
宿主の魔力を吸って育つ
まさかこいつ…
魔術師たちの力を
こうして取り込んで
ここまで強く…！
成体を食えば
宿主の魔力をそのまま手に入れられる
すばらしい発明だろう？


30日経過
お腹が重い…
ボクは男なのに…
チンポが欲しくてたまらない…
従順になってきたな
いい傾向だ
くそっ
汚いものを
擦り付けるな…！
イく度に胎内の生物に
魔力を吸われてるのがわかる…
このまま魔力を喰われ続けたら
取り返しがつかなくなる…♥


50日経過
魔力を全部喰われて…
こんな醜い体にされて…
ボクには何も残ってない…♥
天才魔術師と呼ばれた男も
今や子宮の付いた肉だ
随分とそそる有様だぞ
君の大事な子供は
富豪共が大金を出して
買い取ってくれるが
君自身はどう処分するかな
もうどうなってもいい♥
何もかも忘れるまで
犯してほしい…♥
ようやく
出産だ
産まれるっ♥
出ていっちゃうっ♥
ボクの魔力全部っ♥


ぜんぶ…でてくうっ…♥♥♥
君らのような搾りカスは
錬金術師たちに売っていてな
あ
魔力を搾り切った残りカスでも
魔術師の脳や母乳には錬金材料として
価値があるらしい
母乳が絞れなくなったら
潰して脳ミソを採るらしいが…
ボク…終わるんだぁ…♥
元「男」なら好事家には受けそうだ
性処理便器として尻を振れば
案外長生きできるかもな
はっ…はいい♥
ありがとうございますぅ♥
ボクの輝かしい人生が
こんな終わり方をするなんてぇ…♥
…♥

とある聖女のあふたあ

ドブロッキィ

どこから見ても
普通の女子高生な僕……

でも、普通じゃない
秘密があるんだ

とある理由で先輩達と
異世界転移した僕(♂)。
回復職を選んだら
聖女(♀)にされてしまった。

ガーン

色々あったけど紆余曲折
あって、僕たちは現世に
戻ってきた。

でも、女神様。
なんで僕、女の子の
ままなんですかね？

しかも、あっちの
世界の記憶も残ってるし……


もちろん向こうで夫婦だったコイツもこっちに帰ってるわけで
だ、駄目だってダ……んっ
悪い、ガマン出来ねえわ
うぅ～……
責任……とれよな……バカ


そこからは
もう、若い頃を
思い出して。
まるで猿みたいに
Hしてしまった。
そしたら
当然こうなる
訳で……


魔法で何とか
お腹を目立たなく
しているけれど。
あ♡
あ♡
あん♡
びくん
びく
あ♡ッんっ♡
すきっ♡
すきっ♡
ズッ
ズッ
ハッ♡
ハッ♡
ぞくぞくぞくぞく♡
誤魔化すの
大変なんだぞ
このバカゴリラ
ハッ♡
ハッ♡
ハッ♡
びくん
びくんっ♡
リュズ
ゴポッ♡
でも、こんな状況
でも幸せな僕も
どうかと思うけどさ！

●性変性症妊婦のスローセックス

作：来宮　悠里　挿絵：ぬくいるすす

深夜の室内。ダブルベッドの上に男女が一組一糸まとわぬ姿で入り乱れている。

男の上に跨がるようにして腰を振っているのは、傍目からは小学生か中学生にしか見えない少女だった。しかし左手の薬指には鈍く光る銀色の指輪が付けられている事から、結婚する事の出来る年齢の女性である事が窺える。

同じように仰向けに寝転がって少女の痴態を見上げている男の左手の薬指に同じようなデザインの指輪が付けられていた。

二人は香住という姓を名乗る夫婦だ。

そして、他の夫婦とは違う所が一つだけあった。

「いつも思うけれど……、私がこんな幸せを得ていいんだろうか」

少しだけ男っぽい口調が混ざる少女のような姿の女性……香住真はふと動きを止めると、ペニスを挿入したまま、仰向けに寝転がる男……香住透にしなだれかかる。

「ここに来るまで随分大変な思いをしたんだから、いいんじゃないか。それにそこまで弱気になるなんて、もしかして危険日か？」

「むぅ……そうだけど」

透の胸に甘く爪を立てながら真は頬を膨らませた。

それを微笑みながら痛い痛いと言いつくろって、透は真の頭を撫でる。

「元が男だって、女として生きるのは決めたのはお前なんだから、他の人を気に病んでどうする」

透の耳にも入っている、真に対するありとあらゆる非難。

性変性症という性別が変わる奇病にかかった元少年の現少女に降りかかったのは、好奇とそれと同じくらいの嫉妬だった。

神は得てして望まぬ者にしか何かを与えるという事をしないとのである。

好奇はまだよかった。

嫉妬は時として暴力を持って真を襲ってきた。

その暴力から真の心を支え或いは身を挺して護ってくれていたのが透だった。

結ばれるのは自明の理。結婚の報告をした時はとびきりの祝福を受けたものだ。

「そうだけどさあ……」

透は真を無言でぎゅっと抱きしめる。

体つきは随分と幼いが、それでも女性らしい脂肪の付き方をしている。

そのため今の彼女は誰がどう見ても女性であると断言する。

元々が男性であったことを知るものは随分と少ないし男性であったと言っても嘘だろうと言われる程だ。

それこそプライバシーの問題もある。

真が元々男性であったという事はそれこそ医療関係や、戸籍変更の面で起こした裁判の判例記録を見ない限りは分からないだろう。

要するに一般人には知るよしも無い。

真が性変性症の患者だというのは、証明書が無ければただの風の噂なのである。

「うん、今日こそ出来そうな気がする」

「いや、えぇ……このタイミングで言うの？」

「俺が孕ませる」

「ああもう……やる気十分ですね。中で大きくなったの分かったし」

「俺にだけ見せるしおらしい真が可愛かったからね」

身長差ゆえに、透の上にしなだれかかる真の唇に触れることは出来ないが、額にキスをするくらいのことは出来る。

「それじゃ、たまには攻めようかな」

「わっ……！」

騎乗位から正常位になり、真を押さえつけながら腰を振る透。

人から予想出来ないタイミングで快楽を与えられ、真は嬌声を上げる。

そうやって夜が更けていった。

そして、数日後。

透が仕事に行って家事を済ませてしまった真は用を足すためにトイレへと入っていた。

「……生理が来ない」

そして気付いてしまった。

一抹の不安感と、本来ならとっくに来ているはずの月の物が来ないと言うことに少しの期待

が膨らむ。
　用意しておいた妊娠検査薬を用い、結果を判別する。
　結果からすれば、妊娠を知らせる結果だ。
「アイツ、喜ぶかなあ……？」
　まだ確定では無い。ちゃんとしたことは医者にかからないと分からない。けれども陽性反応が出たという事はほぼ確実に妊娠をしたという事だ。
　妊娠を確実にするためにピルをのむのもここ一年やめていたし、危険日前後を狙って濃いセックスをして来た。その結果が半年ほどの妊活で実を結んだ。
　じんわりとした実感とともに、真はこれからの生活に思いを馳せるのだった。

・

　そして五か月ほどの月日が流れた。
「香住さん、お腹の中の子は元気に育っていますよ」
　診察室。エコーの写真を見せながら、女性の医者は、目の前に座る少女のような姿の女性に安心させるかのように言った。
　目立ってきたお腹の膨らみを愛おしそうに撫でながら、香住と呼ばれた少女のような姿の女性……香住真は嬉しそうにはにかむ。
「旦那様も定期診察の際は必ずお越し頂いてありがとうございます」
「え、ああ、いや私は……」
「特殊なケースですので、やはりパートナーの協力があるというのは、こちらとしても随分と助かっております」
「そう、ですよね」
　旦那様とよばれた長身の男性……香住透は困ったような笑みを浮かべて答えるだけだった。
　特殊なケース。
　真は二十の折り返しに近い歳ではあるが、彼女は元々の性別は女ではなかった。
　性変性症。万分の一程度の確率である時を境に性が変わってしまう奇病だ。
　そして、その奇病にかかってしまった者の平均寿命は果てしなく短い。性差に対応できず自死を選んでしまうことが多いからだ。
　そんななか、目の前の少女は奇しくもパートナーを得て成人を果たし子を成すことに成功した奇蹟の様な例だった。
　長生きをする例はそれなりにあるが、伴侶を得て子を成すことまで出来た例はまるでなかった。
　そのためある種のモルモットのような扱いにはなるが、彼女は医療費と引き換えに手厚い検査を受ける運びとなっている。
「夫にはいつも助けられています」
　しおらしく真は目を伏せてみせる。
「お、おい……」
　明らかに外行きの態度ですと言わんばかりの真の行動に、透は随分と困ったように彼女の肩を軽く揺さぶった。
　そんな和やかなやりとりをしながら、診察室をでる直前。
　真は踵を返し女医の元へと向かうと何事か耳打ちをし、女医がにこやかに頷きいくつか注意点を挙げているようだった。
「決して無理はダメですよ」
　そう念を押された真ははにかみながら小さく頷くと透の元へと戻っていった。
「一体何を話していたんだ？」
「えー？　秘密。でもすぐに分かるよ」
　大学病院からの帰路、透の運転する車の助手席に座っていた真ははぐらかすように答える。
「つわりも大分軽くなってきたからさ、今日くらい一緒にお風呂に入ろうよ」
　はぐらかした真がそんなお誘いをかける。
　それに透はいくつかの思案を巡らせながらも、
「そうだな、たまには入ろうか。ここ暫く体調も落ち着いてるみたいだし、まあ、今日くらいじゃなくても……」
　透は頬を掻きながら、体調が心配だし毎日でも着いてあげていたいという言葉を飲み込んだ。
「なに？　毎日面倒みてくれるのー？」
「そりゃあ、そうでしょ。そうじゃなきゃ一緒にいない。一番大変なのは君なんだから」
　一番大変なのは君という言葉に、真は痛いところを突かれた思いをする。
　真が子を妊る事が出来たのはひとえに、常に隣にいてくれたこの透のお陰だったからだ。

性変性症。神は望まぬ者に不要な物を与える。
学生の時分はよかった。物珍しさから腫れ物を触るような扱いではあったが、それでも真は真であるという扱いをしてくれた。
一番大変だったのは、卒業してからだった。人権団体、ＬＧＢＴ団体。ＴＧ。性変性症という奇病を喉から手が出るほど欲しがっている者達からの外圧が凄まじかったのだ。
妬み嫉み。嫌がらせを受ける日々。
そんな艱難辛苦をあっけらかんと乗り切れたのは、透の存在が大きかった。
元が男であると言うことを知っても尚、それでも真の事を好きと押し切った透に絆された形が幸いしたのだった。
「まあ、それは確かに」
真は男だったときの癖がときたまに出る。
右の口の端を吊上げて下を向いて顔を顰めて含み笑いをする。見た目の良さから信じられない男っぽい仕草だ。
「でも、今、私がここにいるのは、貴方のお陰だから」
すぐ様、男らしい仕草を引っ込めて、もう長年被った女性らしさを表に出してくる。
「無理しなくても良いとは思うけど」
「いいのいいの。処世術ってやつだから」
「はいはい」
何でも無いやりとりをして、スーパーに立ち寄りこれから暫く分の食材の買い出しをして、自宅に戻る。
夕食を済ませて、
「じゃあお風呂入ろうか」
真が透に誘いをかける。
「そうだな。あんまり無理はするなよ？」
「分かってるって」
よいしょっとお腹を支えながら立ち上がる真の肩を透は優しく抱き留めながら、真を先導していく。
五ヶ月でこれくらいに動きが鈍くなっているのだ、もしこれが臨月ならばと考えると、透にとって不安しか無かった。
それでも、妊っている真本人は随分とあっけらかんとしている。
少し前まではつわりで起き上がることも困難であったというのに。
「そろそろ目的を話してくれないか？」
湯船に浸かりながら透は、真にそう言った。
「えー？　まあいいか。あれですよ、安定期というのに入ったので、久々に抱いて欲しいなって」
「は……？　えぇ！？」
ざばんと湯船を巻き上げながら、透は素っ頓狂な声をあげた。
「うわっ！？」
巻き上げられたお湯が見事に真にかかり、真は悲鳴を上げる。
別段驚かそうと思っていたわけではない。
子供が出来て暫くは無理だけれど、無茶をしなければ出来るというのは調べて知っていたし、それに今日ちゃんと確認も取った。
医者からのお墨付きが出たのだから全く問題ない。真にとって今の発言はそう言う認識だった。
「私だって元は男だよ？　高校に入るくらいまでだけど。男だったんだから男の性欲くらいまるよ。透には風俗行ってきていいよって言ってるのに、一回も行かなかったでしょ」
「お前、それは……。俺をクズにしたいのか……」
「えぇ……そういうわけじゃないけど」
「俺は、今のところお前以外を抱く気は無い。嫁がいるというのに店で性処理とかそれこそただのクズじゃん」
「そういうものなの？」
「そういうもんだ」
透ははあっと大きく溜息を吐いた。
「気持ちはありがたいし、お前に負担をかけるつもりもないし、風俗も金がかかるだろ……」
「でもまあ、正直私もしたいし、ちゃんとスキン付けるなら大丈夫って話だから」
体に着いた泡を流して真は二人が悠々と入れる浴槽に入る。
「はああ……あったまるー……って」
ゆっくりと透の体に自分の体を預ける真は違和感に気付き、違和感の発生源を見上げる。
「期待してるのぉ？」
「悪いか」
湯あたりでもしたのかと言わんばかりに頬を

赤らめた透は、それでも隠しはしなかった。
「べっつにー。こんな体でもそうなるって事は、さっき言ったことは本当なんだなって」
「こんな体って、お前はお前だろ。それにそれは出来るべくしてできたものなんだから」
透はそう言って、膨らんだ真の腹を優しく撫でる。
二人の愛の結晶だ。
それをこんななんて言うつもりは透には毛頭なかった。
「それに、俺はお前だからこうなるわけだし」
抱いて欲しいと言われてからゆるりと大きくなり始めた自分のペニスを、真を抱き寄せながら尻に押しつける。
「調子良いこといってるなあ、嬉しいけど」
「それで本当にいいのか？」
「うん。私だって貴方と繋がりたい」
口付けだけは物足りない、肉体の繋がりを味わいたかった。
妊娠するまでは人並み以上にセックスをしていたのに、妊娠が分かった途端ぱったりと無くなってしまったせいで、物足りなさがあったのだ。
「でも無理はダメって言われたから、あんまり激しいのは」
「分かってる、お腹の子が一番だからな」
真の濡れた髪と頬を撫でながら透は言った。
一番はこれから生まれてくる子供。そして次に真の欲求に応えること。
その為に自分の性欲を使うなら何も問題は無い。
それが茨の道を歩いて、やっと女としての幸せを得た彼女のためなのだから。
元が男であろうがそんなことどうでも良い。
真を幸せにしてあげたいと透は思ったのだ。
「湯あたりしないうちに出よう」
「りょーかい」
しっかりと真の体を支えて、浴室から出る。
「うわあ、もうやる気充分じゃん」
お互いにお互いの体を拭きながら、真は浴室から出た途端に隆々とそそり立つペニスを見て笑う。そんな彼女も湯濡れの雫ではない物が股からつうっと垂れていた。
「キスだけで濡れてるお前に言われたくないな」
膨らんだ腹の下は自分の目では見えないからと、真の代わりに体を拭いてやる透はすぐ様その変化に気付いていた。
気付いた上で気付かないふりをしていたが、勃起したペニスを指差して笑われたのだったら、こちらだってそれ相応の反撃をするまでだ。
「いいじゃん、もう！」
照れ隠しにタオルで叩かれた透は、どうせ脱ぐのだからと服を着る暇も与えずに真を抱き上げ寝室に連れ込んだ。
「もお！　急なんだから！」
ベッドに優しく寝かされた真は、お腹に負担をかけない体勢で寝返りを打ちサイドテーブルの引き出しから新品のスキンの箱を取り出す。
「口と手どっちがいい？　口はあんまり好きじゃないけど」
「知ってる。自分で付けるよ」
元々男だったこともあり、真は未だにペニスを口に含む行為が苦手だった。
性変性症によって女性になって十年近い歳月が流れたにも関わらず、元々自分に着いていた器官を口に含む事はしたくない。
噛み千切られた想像をするだけで、今はないペニスが萎縮する感触がするのだ。
「いいよ、久々なんだから付けさせてよ」
よっぽどの事が無い限り最近は付けないことが多かったスキンを付ける。
妊娠を視野に入れたセックスを始める前は当たり前の様にしていた事だったが、最近はそう言う事も少なくなっていた。
「愛撫は……」
「いらない！」
しっかりと濡れている訳ではなく、母胎への影響を考えたら事前の準備は必要だ。
しかし真はそんなことよりも待ちきれない、久しぶりの体の繋がりに疼いている様だった。
「じゃあ、せめてローションくらいは」
同じようにサイドテーブルの中に入っていたローションを取り出し、指先に垂らして真の膣口に触れる。
「ん、ふっ……！」
久しく自分で触れることすら躊躇って居た刺激に、真はたまらず息を吐いた。半年程振りの

性的な刺激。
思っていた以上に体は敏感に反応してしまった。
「大丈夫か？」
「大丈夫、ちょっとびっくりしただけ。塗れた？」
「ああ、それじゃあ入れるぞ」
薄い緑色のスキンにぴったりと包まれたペニスが、仰向けになった真の間に割って入ってくる。
ローションの滑りでぐちゅりと粘っこい音を立てながら、透のペニスは飲み込まれていった。
「大丈夫か？」
「お腹苦しい、かも……仰向けはだめっぽい」
「そうか」
顔を青くした真は溜まらず体を起こして透に抱きついた。
「あ、これいい……でもお腹潰れそう……」
繋がったままの形で対面座位の形になったはいいが、やはり腹の中の子の事を考えると、無条件に密着するような体位は難しい。
「ちょっとだけ、このまま感じさせて」
膣から産道へと日ごとに作り替えられてきている中、まだ入り口としてペニスを受け入れる事が出来るのだから、その感触を覚えておきたかった。
「んっ」
そんないじらしさを感じ取った透は、真にそっと顔を寄せ口付けをする。
ぴったりとくっつけられないのならば、くっつけるところをくっつければいいのである。
「無理だけはしないでくれよ」
「無理はしていないんだけど、楽な体勢が思い浮かばない」
困ったように笑う真に、透もどうするかと一緒に考える。
「あー、こうすれば良いか、一度抜くぞ？」
しがみついている真をベッドに優しく寝かせ、ペニスを抜き透は真の横に寝そべる。
「これなら少しは楽だろ」
「わひゃ！？」
真の背中から片足を持ち上げ挿入をする。
側位の形で透が真を後ろから包み込むような形になった。
「これいいかも。顔見えないのが難点だけど、お前身長高いから、上向けば見れるや」
「お前が小さいのが悪い。お陰で俺、ロリコン扱いなんだけど」
「孕ませてるんだから、あながち間違って無くない？」
密着してお互いの体温を交換し合える体位。
そして、横向きなら妊娠したお腹が他の臓器を圧迫することはそんなに無い。
「まあ、好きになった女がたまたま性変性症で女になった元男で、小学生か中学生に間違えられる小さい子だったってだけで、俺は至ってノーマルな性癖のはずだけどなあ……」
透は困ったようにぼやいた。
「確かに、割と幅広いジャンルのエロ本とかＡＶとかあるよね。私が妊娠してから大分増えたみたいだけど」
「俺の中での妥協点だな。風俗はダメ絶対。エロ本ＡＶはＯＫだ」
「現実じゃないから大丈夫と」
「そう言う事だ。お前も嫌だろ、俺のチンポが別の女に入ってきたこと告げられるより」
「それはまあ、そうだけ……ど。ぐぬー」
頬膨らませる真の頭の天辺に透は顎を乗せて、優しく真の体を撫でる。
「我慢は良くないから、これからも相手はするけれど、激しいのは無しな」
「分かってる。私だって、流したくないもん」
膨らんでいる腹の上にある透の手の上に、真は自分の手を乗せながら慈しみを持って答えた。
出来たら嬉しいなと思って、何も付けずにセックスをして、本当に出来たときは不安でいっぱいだった。けれども、日を追う毎にお腹の中に命を感じ始めると、それがたまらなく愛おしくて仕方が無くなってきた。
でも、それは同じように愛おしい人と繋がれないことと同義で、二律背反の様な思いがずっと辛かった。そして今、医者からＯＫが出たのだから、それはそれは嬉しくてたまらない。
「ゆっくりな。ゆっくり動くぞ」
「うん……もうね、入ってるだけで割と満足？」
「ワガママだなあ」
「ごめん」
「謝るなって」



申し訳なさそうにする真に透はぎゅうっと体を抱き寄せながら耳元で囁く。
「それじゃあどうする？　俺は別に射精しなくてもいいけど。でも折角ならお前の体で抜きたい」
何時間かかっても言い、彼女が女として透を求めるなら、透も男として射精したと事実で彼女がちゃんと女であるという事示してあげたかった。
妊婦だから射精できなかった。
なんていう事は求めてきてくれた最愛の人に失礼だから。
「うぅ……ゆっくり動いてね。お腹の赤ちゃんのために」
身長差のせいで、上目遣いにしかならない体位。
もうすっかりと女としての仕草が自然と出るようになってきた彼女のお願いに、透は笑って答えた。
「わかった。じゃあ動くな？　きつくなったら言えよ」
そう言って、透はゆっくりと腰を動かす。
正常位や後背位といった動きやすい体位では無いから動き自体はぎこちなくはあったがそれでも、彼女のためにゆっくりと腰を動かす。
一突きする度に彼女の反応を伺う。
もし苦痛に少しでも顔を歪めるようなら即座に辞めるつもりだ。
真の表情はリラックスをしているようだった。
「なんか、普段しないセックスの形だから、変な気分」
「それは……」
「ち、違うの。悪い意味じゃないから！　なんというか、なんかこれ、言葉にしづらいんだけど、凄く良いの」
慌てて顔を覆って取り繕う様子が、まだ十代終わりの頃の彼女のようで、それが透に取って随分と懐かしい物に感じてしまった。
「それならよかった。最近オナニーもしてなかったから、こっちもすぐにイケそうだ。もしお前がイキたいなら付き合うから、遠慮はするなよ」
最後にしてから随分と変化した膣内は、締め付けるというよりも柔らかく包み込むように透のペニスに刺激を与えてくる。
スキン越しの今までと違う刺激に、早くなる腰の動きを抑える事に必死になる。
「なんかね……ほんと、イキたいとかそういうのより、ずっと繋がってたい。もし二回戦とか三回戦とかできるなら、お願いしたいなあ……」
しおらしく酷な要求をする真。
それが酷な要求であると分かっているがために、最後に無理はしないでとだけ付け加えてくる。
「無理はしないでって……。それは無理をしてくれって言ってるような物だろ、分かっていったよな」
苦笑交じりに問いかけると、真は舌をだして返事をしてくる。
「バレた？　今日くらい私を満足させてよー」
「全く……そのつもりで乗ったんだから、お前がギブアップするまで付き合うに決まってるだろ」
「あはっ、透、カッコイイこと言ってるけど、やってることセックスなんだよなー」
見た目の少女然とした笑みを浮かべながら、少しだけ混じる男口調に透は興奮した。
それから、夜が更けて日付が変わるくらいまで、緩やかな愛の行為は続いたのだった。

＜了＞

TSF孕ませ合同誌




ようこそ
お越し下さい
ました
わたくしが
今晩のお相手を
務めさせて
いただきます
娼館の牝犬
/新川豊一
不肖の身ですが
精一杯ご奉仕
いたします
一時でも
無聊のお慰み
になれれば
幸いでございます
どうぞ心ゆくまで
この身体を
お楽しみください
よーしよし
こっちに
来い……
いいぞ
俺の好きにして
いいんだな？
はい……
どうぞご存分に
辱めてくださいませ
くっそ
なんで俺が
こんな目に…

修学旅行の
班行動の最中
気が付いたら
魑魅魍魎が
跋扈する謎の
ファンタジー的な
異世界に来てしまった

帰り道もわからず
ただ彷徨い続け
やがて疲れ果て
ついに友人たちは
無銭飲食を始めた

辺りが暗くなった頃に
身体に変化が起きて
犬娘になってしまった
二人は完全な犬になった
そして角の生えた
巨漢に捕まった

無銭飲食の件かと
思ったらここは人間は
存在しているだけで
罪になるらしく
捕まえたら好きにして良い
という酷い世界だった

そして一帯の元締め
をしているどう見ても
カタギじゃない
男の所に連行された

人間はすぐひき肉に
しているんだが別に
死にたくはないだろう？
では別の方法で
対価を払ってもらおう

幸いにも君は
器量が良い…
その肉体を
生かせばすぐに
自由になれるだろう

ここは娼館だ…言っている
意味は分かるな？
その美貌ならかなりの
値がつくはずだ

そうだな…百人だ
百人客をとったら
解放してやろう

まずは魔女に
枷をつけさせる
連れて行け

あの……
そいつらは？
ペットショップ？

食用だ

逆らったら
殺す、と
言外に
言っていた

さらば
友よ

この首輪は外そうとすれば
首が飛ぶ
命令に逆らっても首が飛ぶ
逃げようとしても首が飛ぶ
命が惜しかったら大人しく
従うことだね

こっちは避妊紋だ
身籠ったら
商品にならない
からね
これで
いくら膣内に
射精されても
妊娠する
心配はない

…なんだよそれ…
意味わかんない
んだけど……

ただしこいつは
絶対じゃない
イカされる度に
孕みやすくなる
ようにできてるのさ

こいつの原動力は
快楽に抗う
意思の力だ
お前が
絶頂すればするほど
避妊膜は薄まる
子を孕んだりしたら
すぐにお払い箱だ
気を付けるんだね

キィン
キィン
キィン

なんで
そんな仕様に
なってんだよ…
ちゃんと
避妊しろよ…

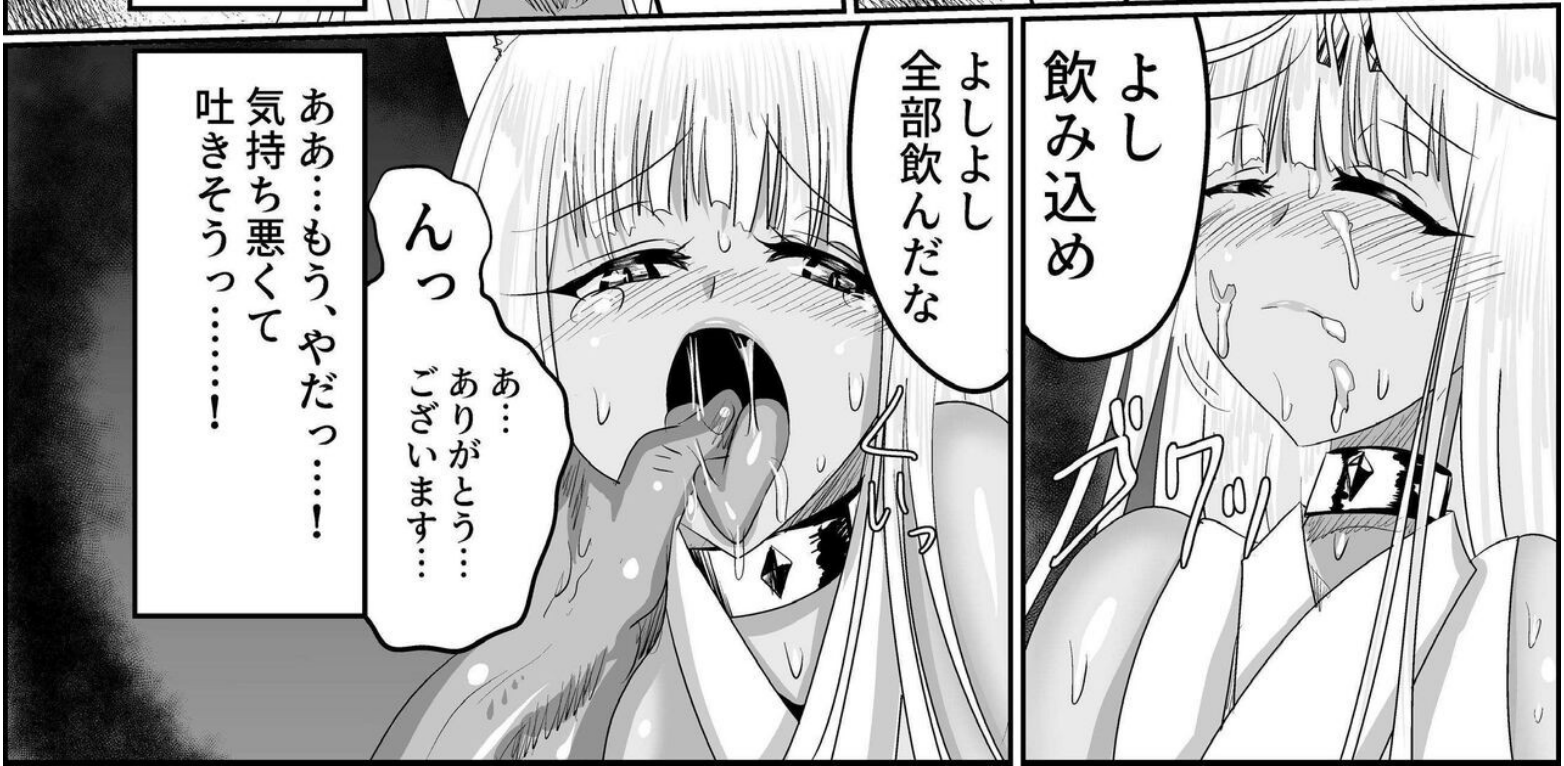
マグロじゃ
困るんだよ
娼婦は客に
奉仕するのが
仕事なんだから
客に甘えて
受け身でいたら
あっという間に
孕まされて
見受けされて
肉奴隷か
食肉用に加工だ
せいぜい
真面目に
仕事することだね

……はい


柔らかい口だな…舐めてくれや
んちゅ…っ、ふ、ふぁい……ごほうひひゃへてくらはい…
ああ……嫌だなんで男のモノなんて舐めなきゃいけないんだ
失礼しますん…っ
んちゅっれるっ…
れろっ
んちゅっ、ふむっんっ、んうっ…んちゅるるっ
気持ち悪いっ…生臭さが喉の奥まで届いてっ…吐きそうっ
ほらもっと舌使って舐め回してくれよ
れろっ
先っぽを啄むみたいに吸いついて…そうそう
ちゅっ
ちゅっ
ぢゅぽっ
あーまだるっこしいな
んぐっ!?
ずぽっ


射精すぞっ
こっち向け！
びゅくっ
え…？
んむっ
ふぐうううううっ
おぷっ、
ふぁっ
んっ、
んぐうおおおおっ
びゅっ
びゅるっ


こぼすなよ
口開けて見せろ
ん…
ふぁい…
何やらせるんだ
悪趣味な
奴だな……
舌の上で
転がしてよーく
味わうんだ
我慢しなくちゃ…
逆らったら
殺される…！


よし
飲み込め
よしよし
全部飲んだな
ゴクッ
んっ
あ…
ありがとう…
ございます…
ああ…もう、やだっ…！
気持ち悪くて
吐きそうっ……！


君、凄く可愛いね
入ったばかり？
へぇー気に入ったよ
あ、ありがとう
ございます…
じろじろ胸ばっか
見やがって…
目線バレバレなんだよ
たぷっ
どうぞご存分に
お楽しみ
くださいませ…
うわっすごい
指がめり込むっ
ひあっ!?
ぴくっ
むにゅっ
あ、ごめんね
痛かったかな？
なに、これっ…！
女の胸って…
こんなに感じる
のかよ…！
い…いえ、
大丈夫です
ぎゅっ…
好きに触られたら
やばいっ…！
ではこの胸で
ご奉仕させて
頂きますね
うっすごいっ
柔らかくて！
包まれるみたい
ぴくっ
ぷるん
すりすり

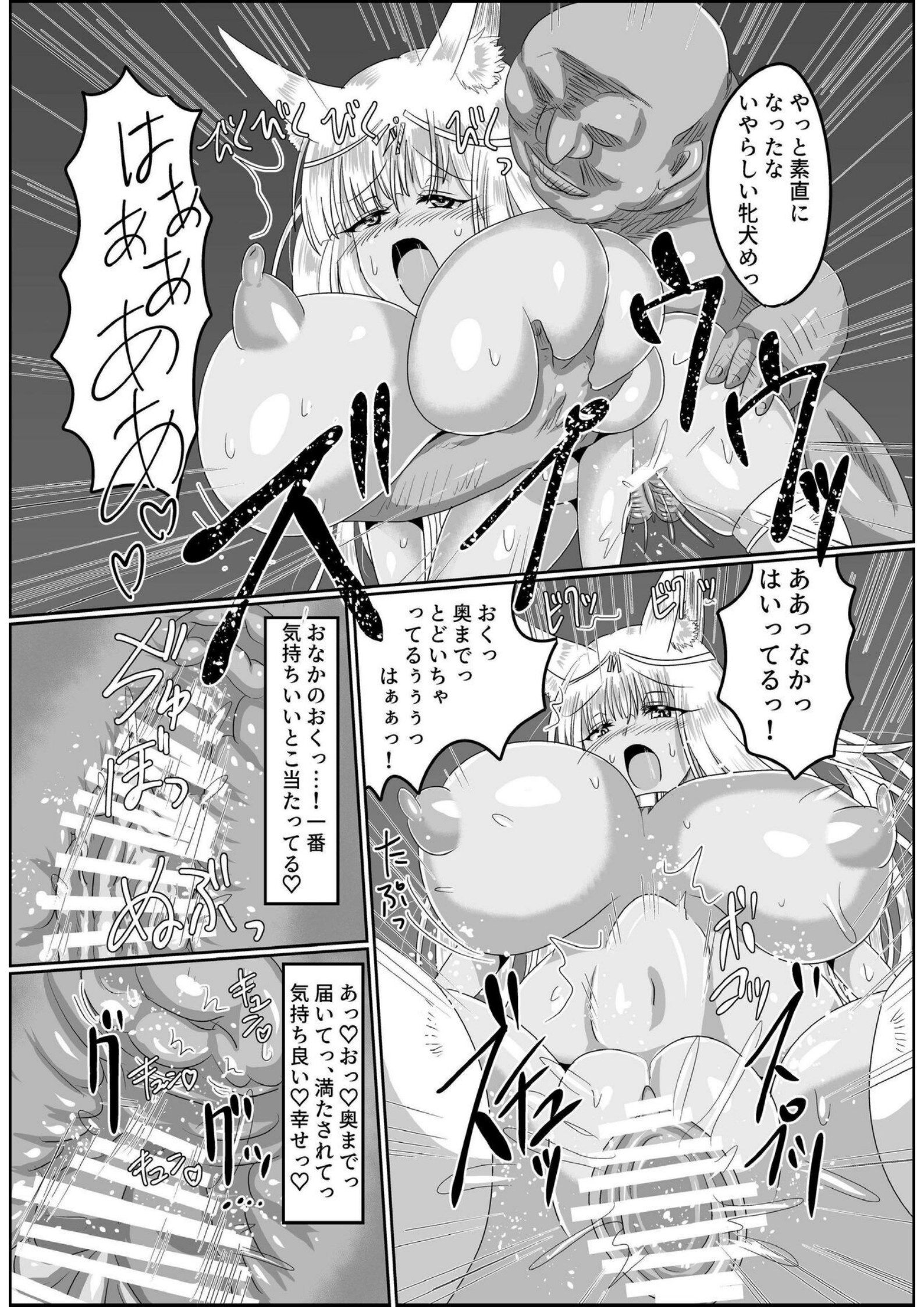

はぁっ
ふうっ
あっ、これでもっ
感じちゃう…っ
むねっ、ひびくっ…！
すりゅ
すちゅ
すちゅっ
早くしないとっ…！
イけっ…イけ、イけっ！
ビクッ
ビクッ
すちゅ
すにゅっ
ビクッ
あっ、
出そうっ
手止めてっ
んっ、あっ、
…えっ？
ひっ!?
あ、あぁぁぁ
ぁぁぁぁっ！
ぐっ
ぐっ
ぐっ


そうして少しは慣れてきた頃
何これ？…変な匂い
持っていきなアロマのオプションだ
シュン
シュン
フーッ
フーッ
ムワアッ
…うわぁきっついなんかヤバそう…
待っていたよさぁこっちにおいで
は…はいよろしくお願いします
見るからに汚らしい親父だなぁ…さっさと終わらせよう
あ…え？
がしっ
効いてきたな媚薬香をたっぷり吸ってきたろう
び…や、く？
ワシはここの常連でね…気に入った娘を回してもらってるんだよワシの子を孕ませて妾にしてな
ブロッ
さぁてまずはこのうっとおしい守りを消してしまおうか


身体…しびれて…
なんで、あたま回らな、
は、嵌められた？
え、あ、ま
まって…あの
その……
まぁまぁ
何を考えなくて
良いぞ
君はただ可愛く
泣いておればいい
すぐに孕ませて
やるからな
ちゅっ
ヤバい…、っまずい
まずいっ…!!
はぁぁう
ううっ！
おお、素晴らしい
見た目以上の
柔らかさだ
むにゅうっ
くぅっ、
あ、あぁっ！
ぐにぃっ
いつもより
胸、敏感になって
…これだけでっ
ひあっ!?
ぎゅっ
イクっ
イっ…
イクぅぁぁぁ
ぁぁ
ビクッ
ビクッ
乳だけでイくとは
あさましいなぁ…このまま
頭がとろけるまでアクメ
させてやるぞ
むにゅっ
にゅっ

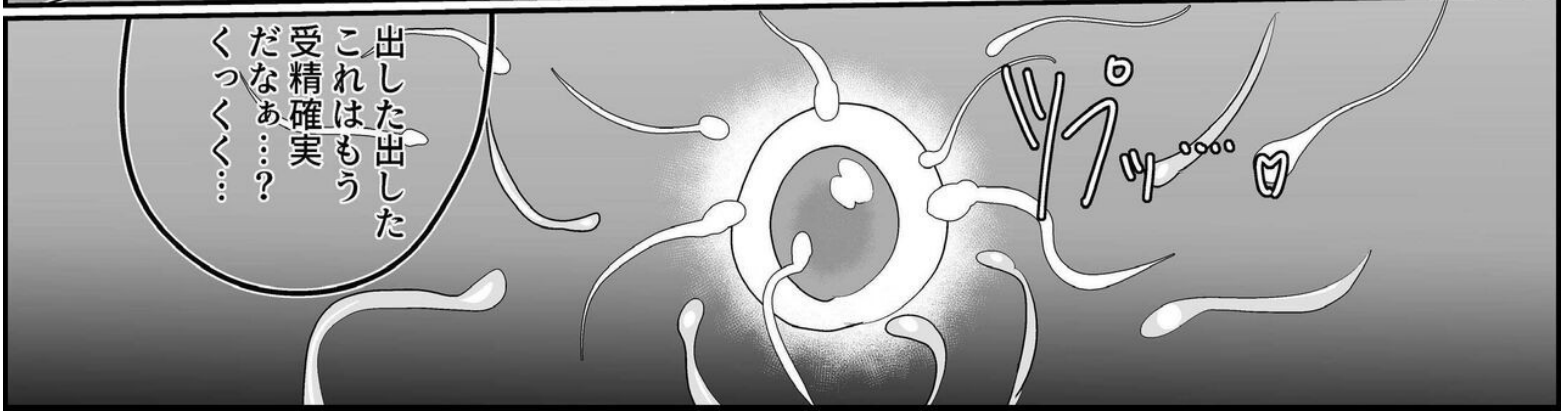

おっ♡
おっ♡
んおっ♡
ぬちゅっ
ぬちゅっ
あぁ♡
おおおっ♡
ズンッ
ぬちゃっ
ぬぷっ
ずにゅっ
ズプッ

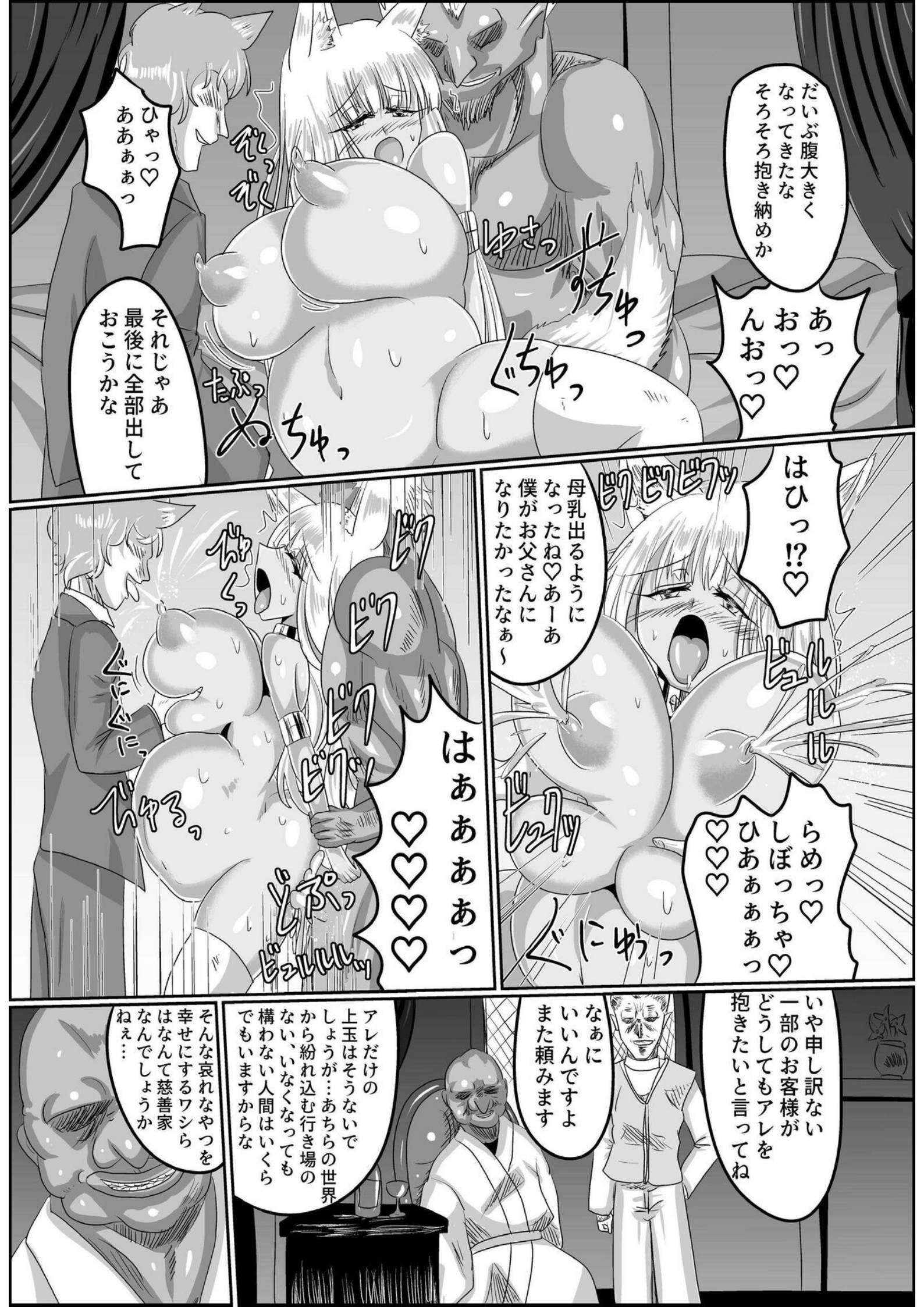

だいぶ薄れてきたな
キィン
キィン
そろそろこいつが欲しいだろ？
ずる
あ？、お、おっき…ちがう、何考えて…こんなもの…
ドキュン
ビンッ
ビンッ
目が釘付けだな素直になったらどうだ？ん？
ぐりっ
ちが、ほしくなんて、な…なんでこんな、体、あついの中が熱い…いれて、ほし…欲しくな、…ってきて…
あ、え…
どうして欲しいか口に出すんだ
…て、さい
おちんぽ挿入してくださいっ
種付けして…私を牝にしてくださいっ！


やっと素直になったな
いやらしい牝犬めっ
はぁぁぁぁ♡♡
ああっなかっはいってるっ！
おくっ奥までっとどいちゃってるうううはぁぁっ！
おなかのおくっ…！一番気持ちいいとこ当たってる♡
あっ♡おっ♡奥までっ届いてっ、満たされてっ気持ち良い♡幸せっ♡


ぢゅぶっ
ほれ、子宮が降りてきてるのがわかるだろう
ほっ♡
おっ、んおぉっ♡
ちゅっ♡
お前の身体が孕まされる準備を始めているんだ
あたってる♡子宮口っ♡
コツコツノックされてるっ♡
奥まで届いちゃってるっ♡
あおっ♡
はらむっ…
今射精されたら絶対受精するっ♡
ほおおっ♡
人生終わっちゃうのにっ…うれしくてしあわせで…たまらないっ♡♡
ほれどうだ
欲しいか欲しいだろう
精液膣内に欲しいだろ
ひゃっ♡ひゃい♡
欲しいれす♡
たねづけしてっ♡
せーえきっ♡
なかにだしてっ♡
はらませてくださいぃぃ
♡♡♡♡♡♡♡♡


あぁ…♡
あぁ…♡
あぁ…♡
びくっ
びくっ
びくっ
びくっ
ゆさっ
ドクッ
ビュルルル
ビュルルル


出した出した
これはもう
受精確実
だなぁ…？
くっくく…
ドプッ…


だいぶ腹大きくなってきたなそろそろ抱き納めか
あっおっ♡んおっ♡
ぞくっ
ゆさっ
すちゃっ
ぐちゃっ
たぷっ
ぬちゃっ
ひゃっ♡あぁぁぁっ
それじゃあ最後に全部出しておこうかな
はひっ!?♡
ビクビクビクッ
ビュルルル
母乳出るようになったね♡あーぁ僕がお父さんになりたかったなぁ～
らめっ♡しぼっちゃ♡ひあぁぁぁっ♡♡♡
ビクッ
ぐにゅっ
ぐにぐにっ
びゅるっ
ビクビクビクッ
はぁぁぁぁっ♡♡♡♡
どぷっ
ビュルルルッ
いや申し訳ない一部のお客様がどうしてもアレを抱きたいと言ってね
なぁにいいんですよまた頼みます
アレだけの上玉はそうないでしょうが…あちらの世界から紛れ込む行き場のない、いなくなっても構わない人間はいくらでもいますからな
そんな哀れなやつを幸せにするワシらはなんて慈善家なんでしょうかねぇ…

「脱出の条件はボテ腹おせっせです」
原作このざま　挿絵ぬくいるすす

「んっ……っそこはっダメッ♡」
艶やかで腰まである長い金髪、肌もピチピチでプニプニして柔らかそうな肉質、胸もほどほどに育っており、どこからどうみても完全なる美少女が……
「くあっ、ふっ……ふぅっ……ん」
閉ざされた部屋で性行為に励んでいた。
なぜこんなことになったのか時は少し遡る。

荒木清彦と木下敏明が目を覚ました時、そこはモノが全くなく真っ白い部屋だった。
「敏明、お前ここがどこかわかるか？」
「キヨと違って昨日は素面だったけど、僕も目が覚めたらこんなところで検討もつかないよ」
二人は市内の大学に通う仲の良い男友達、親友だった、昨日は週末ということもあり二人で馬鹿騒ぎで大いに盛り上がっていたのだった。
「だよなぁ……昨日の盛り上がりのせいで頭痛いし」
「ただの飲みすぎだよキヨ、それにしてもそろそろこの状況に説明が欲しいねぇ」
緊張感が足りてないのか、のんきなことを言い合う二人、そうしていると部屋の天井から声が聞こえてきた。
『テステスあーあー、聞こえてるな、聞こえてるだろう』
『清彦君、敏明君、私は君たち二人を閉じ込めたものだ』
明らかに合成音声で誰かわからないがその内容には二人ともすぐに反応した。
「俺たちを閉じ込めてどうするつもりだ！」
「そもそもなんなんだお前は！」
二人のその反応にフフフと笑いながら天井から返答が聞こえる。
『そうだな、私のことはティーとでも呼んでもらおうか、そして少しばかりお題に付き合ってほしいのさ』
「お題……」
ティーと名乗る声からのお題というワードに疑問の声を上げる敏明。
『そうお題だ、今から君たちにはこれからあるお題が出される、それをクリアしてもらえばこの部屋の扉を開ける。簡単だろう？』
「断ったら？」
少し苛立ちながら大事な確認を取る清彦。
『ここで死ぬまで過ごしてもらうだけだ、無論そのような選択をするとは思ってないがね』
ティーが喋り終わると天井が開き吊るされたバナナが出現し、壁からはブロックと棒が出てきた。
「吊るされたバナナにブロックと棒……」
何かを察し呆れたものを見る二人、だがそれを気にせず説明をするティー。
『この吊るされたバナナを取り食べる、そうしたらこの部屋の扉を開けよう』
そうして音声は切れ、微妙な空気に包まれた二人とバナナが残された。
「これアレだよねゴリラの……」
「……それ以上言うな敏明……とにかくとっとバナナを取って扉を開けてもらおう」
清彦が背伸びをしながらジャンプをすると直接バナナをつかみ取った。
「食べるか？」
「バナナはいらないよ、にしてもキヨは背が高くて羨ましいよ、簡単にとっちゃうんだもん」
「まあ身長は個人差あるしな、ではバナナいただきます」
清彦はバナナを食べ切った。そのとたん閉じられていた扉がガタガタ音をたてて開き始め、出口へ向かう二人、そして落胆するのであった。
「うんまぁ、嘘はついてないな……」
「開いた先に2F目って書いてなかったら完ぺきだったね……」
扉を開けるとそこもまた白い部屋であった。
『すまない、部屋の扉を開けると約束したが、次の部屋でも閉じ込めないとは言っていない。本当に済まないと思っている。』
入った瞬間にティーが喋ってくる
「すまないと思っているなら出せよ！」
『この調子で部屋を開けていったら最後には出れるさ、頑張って無事に脱出してくれよ？』
音声が切れ、二人は次のお題を解くことになる。

25Fと書かれた部屋に着いた二人、そこは今までの何もない白い部屋と違ってテレビや雑誌、キッチンやベッドなどもある一般的な普通の部屋だった。

「さっきまでと違ってとまともな部屋だな」

「今度は何されるんだろうね、でもベッドがあるならゆっくり休みたいよ僕は」

キッチンを見回す清彦にベッドに入ろうとする敏明、各々が物色と睡眠をとろうとしているとまた音声が聞こえてくる。

『四分の一突破おめでとう～そろそろ疲れもでてきたじゃろうから、特別にこの部屋でゆっくり三日ほど休むといい！』

そのとたんタイマーが作動し、72時間のカウントがスタートした、しかし声はまだ続く。

『だが、休むために君たちはこの怪しい薬を一粒飲んでもらう、この薬を飲まないと食材は使えないぞい♪ちなみにどんな効果があるかは飲んでからのお楽しみ』

そうしてA、Bと書かれた薬が食卓の上に置かれた。

「ゆっくり休めると思ったのにこういうやり方か……」

「諦めて飲もうキヨ、でそれどっちがどっちの薬を飲む？」

「どっちでもいいなら俺はAを飲むよ、敏明はBで頼む」

意を決して薬を飲む二人、だが薬を飲んでもすぐには変化がなかった。

「何も起きないな……効果なしか？」

「……まだ症状が出ないだけじゃない？それより今はゆっくり休もう、変なお題ばっかりやらされたせいで疲れてるんだよ、そんな状況でも食事に睡眠にありつけそうなんだし」

薬を飲んだ二人は何も効果がないことを不審に思いながらも一旦置いておいて、ご飯を食べじっくりと休憩することにした二人。

そして薬を飲んで2日ほどたってから薬の効果が起きた。

「なんじゃこれえええええええ」

眠りについていた清彦のベッドから少女の悲鳴が響く。

「どうしたのキヨ……って一体どちら様ですか？　そこには僕の友人が眠っていたはずなんですが……？」

少女の悲鳴で起きた敏明の目前に、ベッドで寝ていた清彦の代わりに美少女が存在していた。

「俺だ、清彦だ！　目が覚めたら起きたらこうなってだんだよ！」

清彦の出す声は完全に女性のそれであり体は高かった身長が縮んでおり、髪も伸びロングヘアーになった金髪が美しく映え、胸も少々膨らんでおり、若干童顔ながらも美少女にしかみえず、とても男だったとは思えなかった。

「なんなんだよこれ！　アレか二日前に飲んだ薬のせいか！」

狼狽する清彦、その様子を監視し面白がってか笑いながらティーが喋ってくる。

『クフフ美少女になるクスリを飲んだのは清彦君だったか、おめでとう！　清彦君、君は理想の美少女になったぞ！』

天井からの声で少し正気に戻った清彦。

「やっぱりあの変な薬が原因か！　元に戻しやがれ！」

『戻す？　何をもったいないことを！　まあ、脱出した時にも男に戻してほしいと言うのなら戻すと約束してやる！』

そうして音声が切られ部屋に美少女と男が残った。

「絶対しばく、今すぐしばく」

「目が覚めたら親友が美少女になっていました、まあ気持ちはわかるけどあと一日はここから出られないんだから落ち着きなよ」

「お前は良いよな男のままで！　ったくあの時の薬でこんなことになるなんて……」

男のままだった親友へ自嘲気味に悪態つく美少女姿の清彦。

「まぁ僕が飲んでた可能性も十分あるけどね、それより汗が凄いよ？　いったんシャワーでも浴びて体を綺麗にしてきたら？」

敏明に指摘され、思った以上に汗をかいていることに気づいた清彦。

「あー……そうだな、すまんちょっとシャワー決めて冷静になってくる」

そうして清彦はシャワーへ向かい。何故か顔を赤くして帰ってきた。

清彦が女体化してからも健気に脱出を目指し必死にお題をクリアしていく二人、だがこの部屋で二人にとって強烈なお題が出された。

『69F目のお題は簡単、二人で仲良くセックスしたまえ』

「「は？」」

ティーの出した破天荒なお題に声がハモった、内容を理解して、お互いがお互いの顔を見合わせ、顔を高揚させモジモジしている。

「……やるか敏明！」

意を決した清彦が叫ぶ、その声は震えていた。

「マジか……マジでやるのか今ここで……」

お題のため、ここから脱出するために二人は裸になったが。

「全然勃ってないじゃないか！」

「そりゃ体は美少女でも今まで男として一緒に生活していたわけで、そっちの姿が印象に残ってるからねぇ……」

敏明の体の方はあまり乗り気ではなく、全然勃たなかった。

「ああもうじれったい！」

清彦の柔らかくなった手が敏明のちんちんを持つ

「キヨ触ったら汚いよ！」

「いいからさっさと気持ちよくなって勃たせて終わらせろ！」

清彦にとって自分のを弄ることに対して割とよくあるのでまったく抵抗はなかったが、他人のものを弄るのは初めての事だった。

「き、キヨ……やわらかいのがその……」

ぐにっとして生暖かい存在が少しずつ、少しずつ固く長くなっていく。

「いいぞいいぞ、その調子だ」

そうして敏明のちんちんは入れるのに適したモノになった。

「それじゃあ……挿れるねキヨ……」

双葉が緊張しながら清彦の体にちんちんを入れる。

「んんんあああっ！」

ブチブチブチっと清彦の処女膜が破られる。

「い、いたいっ、つぅ……もっと優しくしろ」

「ご、ごめんじゃあ、動かすね」

ゆっくりした動きでちんちんを根元までねじ込んだ。

「あぅ！　まて、それでもまだっ……」

身体に人のものを入れるという初めての感覚に戸惑いを受ける清彦。

「キヨ、君の膣内、狭くてあったかくて良いよ、大丈夫ちゃんと優しくするよ」

「くっ、んっ……ふぃ……」

意思に反して勝手に声が出る、最初は痛みだけだったのが次第にそれだけではないと気づき始めた。

「あ……あむんっ……んぅ……」

「締りがきつくなってきたね、気持ちよくなってきたのかな？」

硬くて長い敏明のちんちんが出たり入ったりしながら清彦の肉体は甘い刺激を得ていた。

「くっ……こんなの、知らない……知らなかった……」

女の身体とはこういうものか、知らないことを一つ知った気になる清彦。

「ふふふ、可愛いよキヨ、キモチイイかい？」

「うるさい黙れっ……さっさと出しちまえっ……」

気持ち良さを否定できないが、それを認めると何か変わってしまいそうで認められない、清彦はこの痛みと気持ち良さが早く終わることを願った。

「素直じゃないなあ、じゃあいくよ！」

敏明のピストン運動が早くなる、出す直前だった。

「キヨ、なかでだすよ！」

身体の中に男の精を出される、初めての事に意識をしてしまったせいか清彦のアソコがきゅっと締まってしまう。

「あぁ、良いよ、いくよよ！」

その言葉に腰がぴくっと震え、清彦のなかに精液が取り込まれていく。

「ん、んんんぁ……うんんっ……」

中出しされて息があがる清彦、その顔は何とも言えない嫌悪感と幸福感に満たされていた。

「精一杯出しやがって、もし子供が出来たらどうするつもりだ！」

「ごめんごめん、つい止まらなくなっちゃって、それにもし子供が出来たら責任は持つし」

「ま、まぁ意外と気持ち良かったけどな……」

「今何か言った？」
「言ってねぇ！　それよりも扉は開いたんだしさっさと行くぞ！」
照れくささを誤魔化すように清彦は叫びながら次の部屋へと向かっていき敏明も追従した。
そして誰もいなくなった部屋でティーの独り言が聞こえてくる。
『まぁ普通なら子供はできんじゃろうねー普通ならねーでも薬の効果がまだ残ってないとは一言も言ってないんじゃよねぇ……』

なんやかんやあって二人は９９Ｆと書かれた部屋までやってきた。しかし清彦の体は見事なまでにボテ腹になっており、その身体には新たな生命が宿っていた。
「うう、お腹が重い……」
「もう少しだから頑張ってキヨ、ここのお題さえクリアしたら外に出れるんだから。」
重荷の身体になった清彦を支える敏明、そして最後のお題が提示される。
『今まで付き合ってくれてありがとう！最後のお題も簡単、敏明君が清彦君の身体にちんちんを入れ、その状態で清彦君がピースをする、簡単じゃな！』
そんな内容のお題を言われ頭を抱える二人。
「またこんなパターンか……」
「諦めようキヨ、もうさっさとした方が早いみたいだ」
敏明が下になり、そのうえに清彦が乗りかかり挿入し始めた。
「はぁつ、はっ、んんん……どうだ敏明ッ、気持ちいいだろう？」
清彦は一心不乱に腰を振り出す、敏明の肉棒が綺麗に入って大きくなったお腹と成長した胸が谷間を作っている。
「うん、とっても気持ち良いよキヨ、でもそんなに激しく腰を振るとお腹の子に障るんじゃないかな？」
「だ、大丈夫だろたぶんっ……それよりも今は、気持ち良くなる方が大事だろっ……」
清彦は恥ずかしそうに微笑んでから更に腰を前後にグラインドさせる。
「ふふふ、初めてやった時とは大違いだねキヨ、あの時は慌てふためいていて、気持ち良いのを否定していたのに」
「うるさい、ちょっと前のことを言うな」
「はいはい、でも実際に気持ち良いよキヨ」
敏明のその言葉に頬を赤く染めるキヨ。
赤くなったままパンッパンッと音を立てる勢いで激しく腰を振りだす、肉棒とボテ腹まんこからの間で薄く白濁した愛液が出始める。
「ウッ……ッ……行きそうだよ」
ボテ腹の美少女がその言葉に微笑む、そして自身の手をピースサインにし始める。
「ふふふ、んんんっ……これで、これで外に出れる……」
そしてピースサインを見せつけるように、ビュクビュクと膣奥で噴出した敏明の精液が子宮をたたき、ボテ腹美少女に絶頂を味わわせ、悦びに浸りながら清彦はお腹を撫でる。
「ふぅ……気持ち良かった……」
「お疲れ様キヨ、僕も気持ちよかったよ」
そして最後の扉は開かれ、空気を読まないティーの喋りが聞こえてくる。
『お疲れ様！　これにて全フロア攻略完了！　さあその扉をくぐるが良い！』

そうして出口に向かう二人、だが敏明の一言で清彦は足が止まる
「終わったねキヨ、これで男に戻してもらえるね」
男に戻る……当初はその予定だった、だが今はどうだ？　こんな身体にされて、気持ちの良いことを知って、それでもなお男に戻る？
「あっ……ああそうだな、うん男に戻れるんだよな！」
嘘だ、本当はもう戻りたくなんてない、このままが良い、この女の子の身体が良い。
「それじゃあ行こうよキヨ」
「だな、それに閉じ込めたヤツを一発殴らないといけないしな」
清彦はお腹を大事そうに、愛おしそうにさすりながらどうやって女の子のままでいられるか、それを考えながら外への扉へと向かう。
そして二人は無事にこの特殊な空間から出ることに成功したのであった。


99F

いき、いつものように夜の営みを開始した。

「ねぇねぇー続きは？　続きはないのママ」

何処にでもありそうなとある部屋、そこで清彦が自分が産んだ女の子に話をせがまれている。

「うふふ、色々あるけど今日はここまで、双葉はもうおネンネの時間よ、また明日聞かせてあげるからね」

「はーい、でもママも早く寝ないとダメだよー、パパと一緒に遅くまでじゃれて起きてるのトイレに行くときに見ちゃったんだも」

娘の思わぬ一言に動揺する清彦

「じゃれてる……ええ、そうね早く寝ないといけないわね」

そして再び大きくなったお腹をさすりながら肯く清彦。

「お休みなさい双葉、もうすぐお姉ちゃんになるんだから元気で優しくしてあげてね」

「おやすみなさい、お姉ちゃん頑張る！」

結局清彦は男に戻らなかった、あの後女のままでいることを選択し、自身に宿った子供を出産、敏明とともに育てることにしたのだ。

そして無事に2人目の子供も出来たのだった。

「双葉に見られてたかー……そろそろ気を付けないとなぁ……」

そういいながらも清彦は敏明の部屋の前にたち扉を開ける。

「敏明、双葉も寝たし、それじゃあ今日もやろうぜ」

清彦は慣れた動きで敏明の部屋へと入って


うわーっ!?
何だこのカラダ!?
うわっ
この本ホンモノじゃん
友
女エルフ
転生術
お前の仕業かーっ!
ううっ……
イケメンエリートの俺が
なんでこんな目に……
自称イケメンで
ムカついたので
つい……
ふざけんなよ
いいなり♡
エルフちぇんじ
作：ねおしの
元に戻す前に
一回ヤらせてくれよォ!
お願いだよォッ!
嫌だよバカ
お前しか
いないんだ
い、一回だけだからな!


んうっ
や、だい、じょうぶ…
ちょっとじんじんしただけ…うごいて…いいよ
何だコレ
奥まで突かれるとアタマふわふわして何もかんがえられなくなる…！
中に出すぞ！俺の子を孕んでくれ！
好きだ！
ぱんっ
ぱんっ
孕めっ！
ぱんっ
ヤバい！コイツに好きって言われてカラダが精子ほしがってる…っいま中に出されたら…
イくぞ…っ！
やっ!?まっ、やめてえっ!!


どぷっ♥
びゅるるるる
やっ♥中にでてっ♥
びゅっ♥びゅっ♥びゅっ♥
キュ～ッ♥
どうしよう…
オンナとして扱われて
ガチ孕みセックス
気持ちよすぎる…♥


ほら
さっさと元に戻してくれよ
ええーっ!?
女体の快楽に負けて
オンナを選ぶ展開は!?
は!?
ちぇっ
わかったよ…
…あ、あれ…?
友
どうした
い、一度中出しされたら
元に戻れなくなるらしい…
ゴメン…
はい!?


お前っ
ばか
ほんとばか
オレが元の身体に戻れる方法みつけて男に戻るまで責任取って命令聞けよ！
ひはい
ほっへほへふ
友
とれろばか！
数ケ月後
毎日中出しセックスを欠かさないこと。それが俺からの命令だった。
これは責任を取らせる為のものだし。エッチが好きになったからでは決して無い。
俺はまだ男に戻る事を諦めていないし
いつか絶対元に戻ってやる
ぱんっ
ぱんっ
ぼてっ
おわり



「な、なんだこれは……」
　自身の姿の変異に、驚き慌てふためく少女。
　少女が焦るのも無理はない。
　ダンジョンに仕掛けられたトラップの呪いによって、性別が反転してしまったのだ。

　元は男――ヒレンは、腕利きの冒険者だった。
　しかしそのゴツかった腕は、色白く細いものへと変わってしまっていた。
　トラップの効果なのか、衣服も女性のそれと同じになってしまい、装甲の薄さに違和感を覚えるヒレン。

「これじゃヤバい……クソッ」
　片手で楽々と持っていた剣も、今は両手を用いてなお持ち上げることができない。
　これでは、武器に使われてしまうだけであった。

「とにかく、ここから脱出しなければ……」
　受けた呪いの解呪方法が分からなかったヒレンは、ダンジョンを脱出するしか手がなかった。
　ダンジョンから出ることさえできれば、街へ戻り解呪師に依頼して元の姿に戻ることができる。
　頼りになる剣を捨て、丸腰のまま進むヒレン。

　だがしかし、そんなヒレンの願いは叶わぬこととなる――。

女体化トラップに嵌まった男冒険者の末路

温野りょく
SS：伊巻てん



「くそ、離せ！」
　怒鳴るように叫ぶヒレンだったが、グッと押さえつけられた手はビクともしない。
　男のときは簡単に倒せていた下級オーク相手に、為す術なく組み敷かれる。
　武器を持ち合わせず、非力となってしまったヒレンに、初めから勝ち目はなかった。

　――殺される。恐怖におののくヒレン。
　衣服を乱暴に破り取られ、胸元が露わとなる。

「ひっ、なっ何をっ……!?」
　オークが股間の布を引き千切って、股間に冷たい空気がふわりとかかる。

（うっ、何だこの、酷い臭い……）
　むせ返るような臭いに顔をしかめるヒレンだったが、次の瞬間オークのペニスを咥えさせられる。
　同時に、下半身の衣服も破り取られ間髪入れず挿入される。
「ぐっ、あああああぁぁぁっっ!!」
　オークの巨大なペニスはみりみりとヒレンの処女膜を引き千切り、最奥まで突き入れられた。

「うっ、ぎっ、うぷっ……」
　身体の中に押し込まれる異物感に、思わず吐き気を催すヒレン。
　そんなことはお構いなしに、オークは腰を前後に動かし始めた。
「うぐっ、ぁっ、いっ！　ぐうっ、あっ！」
　じゅぷっ、ぐちゅっと水の混ざる音が、薄暗い洞窟の間に響き渡る。


「あっ、ひっ……うぅっ、んっ」
強制的に暴力的な快感を与えられ、初めてのメスイキに身体を震わせるヒレン。
オークのこってりとした大量の精液を、膣奥で受けとめる。
ヒレンの胎内ではオークの精子が蹂躙していた。
オークの精液は、人間のそれと比べ吐出量が圧倒的に多い。
ヒレンの小さな膣内を、あっという間に満たしていく。
子宮の許容量を超え、膣口の隙間から多量の精液が漏れ出る。
「おっ、あっ、おおおっ♥　ひうっっ……!?」
――ぷつんっ。
ヒレンの胎内を満たしていたオークの精子の一つが、ついにヒレンの卵子と結びついた。
「ひあぁっ、ぁふっ……んっ、ぁ……」
自身の身体で起こっていることなど、知る由もないヒレン。
膣内からオークのペニスが引き抜かれ、白く濁った混合液が尻を伝い、冷たい地面を白く汚していった。
ときおりプルプルと震え、絶頂の余韻に浸るヒレン。
しかし、その蕩けるような甘い時間は長く続かなかった。
すぐに別のオークがヒレンの身体を乱暴に押し倒して、白く汚された膣内へ強引にペニスをねじ込んでいった。



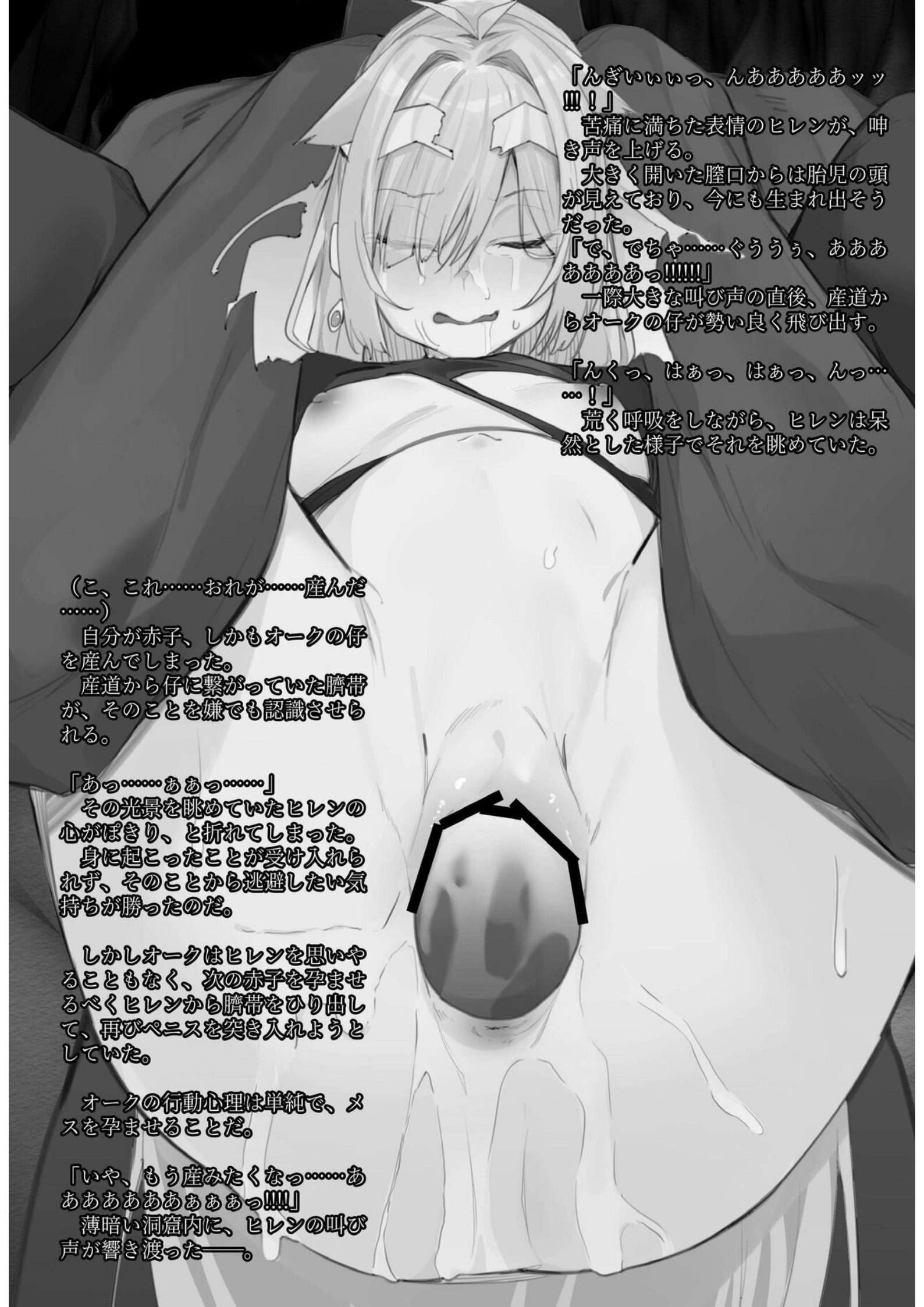
「うぁっ、ぁんっ、奥ぅ、あひっ、当たってぇっ……！」
　度重なる凌辱の末、オークの仔を身籠もってしまったヒレン。
　長い間の凌辱で抵抗する気も失せて、魔物にされるがままとなってしまった。
　自分が母親に、しかも魔物の……と考えると吐き気を催すヒレン。

　一方ですっかり開発されてしまった身体は、オークのペニスに奥を突かれる度、気が狂うほどの快感をもたらされていた。

「あひっ、あああっん、やだっ、らめ、ぁっ！　またいく、いっ、んあああぁぁぁっ!!」
　子宮でオークの熱い精液を受け止め、身体を弓なりに反らせ深い絶頂を味わう。

　心の中ではオークと交わることを嫌がっていたが、身体の方は真逆の反応を見せていた。
　オークの精子を一滴も零すまいと、無意識に膣内をギュッと締め、オークのペニスをきつく締め上げていた。

「あつっ、あちゅい、せぇ、せーえきぃ、あぁんっ!!!!」
　膣内射精の激しいアクメを味わうヒレン。
　ビクビクと身体を震わせ、結合部から白濁液がボタボタと零れ落ちていた。



「んぎいぃぃっ、んあああああッッ!!!！」
　苦痛に満ちた表情のヒレンが、呻き声を上げる。
　大きく開いた膣口からは胎児の頭が見えており、今にも生まれ出そうだった。
「で、でちゃ……ぐううぅ、あああああああっ!!!!!」
　一際大きな叫び声の直後、産道からオークの仔が勢い良く飛び出す。

「んくっ、はぁっ、はぁっ、んっ……！」
　荒く呼吸をしながら、ヒレンは呆然とした様子でそれを眺めていた。

（こ、これ……おれが……産んだ……）
　自分が赤子、しかもオークの仔を産んでしまった。
　産道から仔に繋がっていた臍帯が、そのことを嫌でも認識させられる。

「あっ……ぁぁっ……」
　その光景を眺めていたヒレンの心がぽきり、と折れてしまった。
　身に起こったことが受け入れられず、そのことから逃避したい気持ちが勝ったのだ。

　しかしオークはヒレンを思いやることもなく、次の赤子を孕ませるべくヒレンから臍帯をひり出して、再びペニスを突き入れようとしていた。

　オークの行動心理は単純で、メスを孕ませることだ。

「いや、もう産みたくなっ……あああああああぁぁぁっ!!!!」
　薄暗い洞窟内に、ヒレンの叫び声が響き渡った――。



「あぁ、やあぁん♥　あひぃ、んおぉ♥　そこぉ、きもひっ……♥」
　虚ろな目をしたまま、だらしなく喘ぎ声を上げるヒレン。
　自身の赤子に授乳している最中も、オークは犯すことを止めなかった。

　妊娠・出産を重ね、休むことも許されず凌辱をその身で受け続けたヒレン。
　ヒレンの心も『母胎』としての役割を受け入れ、完全に雌へと堕ちてしまっていた。

　身体は新たな命を宿し、何度目か分からない出産への準備を、粛々と進めていた。
　腹は醜く膨らみ、乳房はずっしりとミルクを含んで重みを増し、乳輪は黒ずんでいる。
　膣奥を深く抉られるたびに、乳輪から母乳がびゅびゅっと勢い良く吹き出す。

「ふあぁぁ、あふっ♥　おっぱいっ、あかちゃんに……ひぅっ♥　かかっちゃうぅ……あああんっ♥」
　抱き抱えた赤子を眺めるように、ウットリとした表情を見せるヒレン。
　そして、手のひらで膨れ上がったお腹を優しく撫で上げていた。
「あぁぁ、赤ちゃ……もっとぉ、あぁんっ、産みたいぃ……産ませてえぇぇぇ……♥」

　そう呟くヒレンを気にすることもなく、オークは腰遣いを一際激しくしていく。
「ひぐっ！　おおおっ、ぐぐぅ、あああっ！　あぁあぁあぁあああああぁぁぁっっ!!」
　幾度となく子宮口を突き上げられ、最奥に熱い迸りを受けてあえなく絶頂を迎えるヒレン。
嫌がる素振りもなく、身体を激しくビクビクと震わせ、艶声を上げる。

　しかし――どこか幸せそうな表情を見せるヒレンだった。

「始。――TSした僕と親友の彼との、結ばれた後の話」

葛葉星乃（くずはほしの）
イラスト・ぬくいるすす

残業帰りの去年のイヴ。変わり映えのない都内のアパートの一室。僕は六年交際した恋人と、初めてゴムのないセックスをした。

その部屋で一緒に暮らすようになって、二年目になる。前日に大掃除をしたわけでもない。このところはお互いに残業続きで、部屋の掃除どころかまともに顔を合わせることすらできていなかった。仕事の合間を縫ってLINEのメッセージを交わすことが、精一杯のコミュニケーションであり、日々の癒しだったように記憶している。

だからきっと、その夜はお互いに欲求不満がたまりにたまっていた。聖夜ということも手伝っただろう。

いつもと変わらない寝室が、妙におあつらえ向きのベッドルームに見えたのを、おぼろげに記憶している。

僕たちはお互いに貪るように体を重ねた。

お互いに唇を求め合い、二人の温度を確かめた。僕が上になる。暗がりに愛おしい顔の輪郭を目でうっすらとなぞって、その美しさに見惚れる。

一通りの前戯で互いを高め合う――僕は〝彼の陰茎を舐める〟。彼は〝僕の豊満な胸を揉みしだく〟。

男女の身体を余すところなく舐め合い堪能して、二人の息はいつしか荒くなっている。

一言も交わさない、静かなセックスだった。散発的な喘ぎ声が、ピアニッシモのハーモニーとなって部屋に反響し、お互いに感じ合っていることを確かめる。いつもとは少しだけ雰囲気の違うそんな厳かさに、僕は息が苦しくなるくらい興奮していた。きっと彼も同じだったように思う――鼻息が獣のように猛々しかったから。

口頭で確認を取り合わなかったが、意思疎通は図れていたのだろう。彼はゴムをつけずに、勃起した陰茎を挿入した。

いつも通り優しく、丁寧に、じっくりと。そしていつも以上に穏やかに、僕らは男女の体温を交換し合って、その日初めて、僕たちは本当の意味で繋がった。

その夜に、僕たちは夫婦になった。

＊　＊　＊

すっかり金色の褪せた鍋に、仕上げとばかりにシチューのルウを入れ込んで、少しかき混ぜた後に蓋をする。

そしてふと視界に入った、左手薬指の銀沢（ぎんたく）に、映り込んだ自分の見慣れた顔を目で追った。

今からちょうど――七年以上も前になるのか。僕は女になった。

朝起きたら突然自分の姿が変わっていて――髪がサダコみたいに長くなって、背がお人形さんみたいに低くなって。服はダボダボで声は子供のように低い。あれから色々なことがあった。その時からずっと傍にいてくれて、僕のことを支えてくれたのが、その時の幼馴染で腐れ縁の親友――今の夫だ。

僕は緩む頬を遊ばせて、指輪の淵に刻まれた僕と彼のサインを優しくなぞる。

童顔で小柄、垂れ目で色素の薄い顔立ちに浮かぶ、へにゃりとした笑顔。前髪ぱっつんの量産型前下がりショートボブ。これが今の僕の姿。

……行きつけの美容室でアレンジしてもらった。結構気に入っている。何より、僕の想像していた以上に彼の度肝を抜くことができたのが――。

「――ただいま」

と、彼の声で僕は我に返った。僕はおかえりと手短に声をかけて、エプロン姿のままぱたぱたと玄関へ駆ける。我知らず顔が緩む。

「お腹の調子はどう？」

疲れた顔色ながら、彼は第一声で僕の体調を気遣った。
そういうところが好きだ。
「ぼちぼちかな」
僕は彼から鞄を受け取る。
「なんかあったらすぐ叔母さん頼れよ？　そのために近くに部屋借りてるんだから」
僕は出産休暇で会社を休職中である。が、彼はそうもいかないため、相変わらず残業がデフォルトのブラック労働続きだ。最近は仕事が少ないために早めに帰ってこられる（とはいっても一、二時間の残業なら当たり前なのだが…）のだが、いつでも僕のことを気遣ってくれる状況にはない。
僕と彼の実家は、ここから電車で三十分ほど行ったところの、東京郊外にある。その方がお互いの通勤に便利だから。でも、お互いに慣れない都会暮らしだからと、彼の叔母夫婦の家の近くに部屋を借りて、いざというときはそこを頼らせてもらえるようにした。
去る昨年の十二月末に、僕は妊娠した。十月も半ばの今ではすっかりお腹は大きく膨らみ、家事をするにも重労働の始末だ。できる範囲で彼に家事をやってもらっているが、朝早くに出社して夜遅くに帰ってきて、その後に更に家事をやってもらうのだから頭が上がらない。
「ありがとう」と口癖のようについて出る言葉に、彼は顔をしかめる。
また、困らせてしまった。
「本当は俺が全部代わってやりたいよ、何もかも」
彼にぽんぽん、と優しく頭を撫でられて、僕はまた涙腺が緩んで、泣き出しそうになる。そんな僕を、彼はたおやかに胸に抱き入れて、背を撫でまわした。
僕は受け取った鞄を床に下ろし、同じように彼の背に腕を回して、その温もりを享受する。
武骨な体格、隆々とした筋肉。運動部に入っていた学生時代よりも、少しお腹が出てしまったのは気になるけれども、裏を返せば大人の男性らしいほっこりとした包容力ともとれる。やっぱり彼のことが、好きだ。
「シチューの匂い？」
僕は顔を上げてふにゃっと相好を崩した。
「当たり。この前食べたいって言ってたから」
「お前、俺のこと好きすぎかよ」
「はー？　そんなこと言うやつには飯抜きだ」
「冗談、冗談！　お前がかわいすぎて、つい」
「ついでに小遣いも減らしてやる」
「理不尽！」
僕は彼の鞄を回収して、スキップで雑にリビングへ向かい、ソファの上に雑に放り投げた。そしてキッチンの鍋の様子を見る。程よく溶けたルウをかき回して、冷蔵庫から牛乳を取り出す。あ、買ってこないともうないや。
「わたくしが買ってきましょうかお嬢様」
「何、その喋り方。きも」
僕はけらけらと笑いながら、ビーカーで牛乳を測り、鍋に投入する。混ぜる。
牛乳パックが軽い。
「冗談だって。もうすぐできるから、休んでろって。それに明日の特売で買うから、いいよ」
「……でも、お前」
「いいから」
僕は有無を言わさず、彼をソファに座らせると、テレビのリモコンを操作して民放をつけた。
流行りの子供向けアニメが流れる。対戦トレーディングカードのアニメで、召喚したモンスターが実体化し、リアルな戦闘を繰り広げるという筋書きだ。僕たちが子供の頃からやっていると思うけれど、とんだ長寿番組である。でも、その時とはキャラクターが微妙に違うような……。
「へぇ、今こんななんだ……」
彼の意識がアニメ番組へ逸れて、僕はしたり顔。キッチンへ戻ると、さくっとサラダの盛り付けを開始する。
冷蔵庫から具材を取り出す——レタスにミニトマトにシーチキン、そしてドレッシング。食器棚からお揃いのガラス皿を取り出す。社会人になって初めての盆休みに、二人で旅行に行ったディズニーランドで買った、記念の品だ。更の底にはキャラクターのイラストがガラスで刻まれていて、かわいらしい。かなり気に入っている。

レタスをちぎってガラス皿二つに並べ、シーチキンを環状に散らす。そして中央にミニトマトを盛り付け、ドレッシングをかけて完成だ。

シチューはぐつぐつと煮立って、おいしそうな匂いを漂わせている。レードルでかき混ぜて、一口味見。口内にほんのりと甘いクリームの香ばしさが広がって、脳内を幸せのドーパミンが満たしてゆく。

やはり料理は、人を幸せにする。それが好きな人のためならば、格別だ——彼のおいしそうに食べる顔を想像した。

僕は火を止めてガスの元栓を閉める。と、お腹が大きくぎゅる——と鳴った。

「……君も食べたいのかな？」

同時に、たまに感じるお腹を蹴られる感覚を感じて、そのお腹の音が自分のものなのか、はたまた僕のお腹に宿る新しい命のそれなのか、分からなかった。

いつかは食べさせてあげるから——と、僕はお腹を撫でながら、優しく慰めた。

＊　＊　＊

女になってからというもの、男の頃にあれだけ持て余していた性欲をとんと感じなくなった。

なくなった、というわけではない。彼とするセックスは気持ちいいし、愛されている実感を得られて好きな時間だ。ただ、夜の寝る前に女性の裸の画像や動画をインターネットで探して、せっせと行為に耽る——そういう気が起こらなくなっただけだ。

彼に愛されたい。抱かれて、共に温もりを感じ合って、彼のすべてに包まれていたい。それが女の性欲というのならば、僕は身も心も女になってしまったのだろう。

それがいつからかは分からない。女として過ごすようになったゆえの変化なのか、それとも女になったあの日に、気付いていなかっただけで既にすべてが変わっていたのか。

ただ、僕は今の僕を受け入れている。

基本的には、普段は穏やかな気持ちで、彼の方からくるのを待っている受け身の体勢である。こちらからセックスに誘うことはあまりない。彼の誘いに乗じて、雰囲気を高め合ううちにこちらもその気になって、性欲を高められる。それが今の僕の性欲の形だ。

でもたまに、本当にごく稀に、僕の方から彼を押し倒すことがある。

その発作は突然くる。なんだか無性に色欲が湧いてきて、顔が上気し息が浅くなる。

最初は、唾をつけて湿らせた指で自分の乳首をいじる。僕は背丈は低いものの、胸は贔屓目を差し引いても豊満で、自分の足元が見えなくなるくらいには大きい。サイズは概算でEくらい。街中を歩いているとしばしば衆目を惹きつけてしまうのが不愉快だが、感度が高く、また彼も僕の巨乳を揉むのが好きなようで、差し引きゼロからプラスに触れるくらいには、自分の胸を気に入っている。

「んっ……んぅ」

最初のうちは少し息が荒い程度で済むが、段々高まってくると、喘ぎ声を抑えるのが難しくなる。AV女優の演技のような喘ぎ声が自ずと喉から甘くついて、自分自身の淫靡な声に更に興奮する。

この時の僕の感性には、うっすらとだけれど女になる前の感覚が混じりこんでいて、女として男に犯される自分、男として女の自分が男に犯されるのを愉しむ自分の意識が混濁し、半ば生じる自己嫌悪をトランス状態が塗り潰したふわふわとした感覚のまま、身体が熱くなってゆく。その心地よさにただ身を任せる。

ただでさえ大きな胸が、妊娠でより張りを持って、ほんのりとした桜色の乳首は薄黒く濁り、胸の重心は下に垂れる。感度はそのせいなのか、それとも長年の開発（オナニーももちろんだが、彼に散々いいように嬲られることによって）の影響なのか、それともその両方の相乗効果なのか、今までよりずっと良くなっているようで、声が抑えられなくなるまでの間隔がかなり短くなったような気がする。もとより抑える気のない僕は、ほしいままにえろい喘ぎ声を自室に乱反射させて、たまの自慰行為に耽る。

幸せの脳内麻薬が分泌されて、僕を明晰夢の中へといざなう。

「はぅっ……。っ――！　ちくび、きもち…　…」

寝言のように譫言を繰り返し、僕は乳首だけでたっぷりと半時間は愉しむ。その頃にはすっかり呼吸の間隔は不規則になっていて、視界は快楽の涙で潤み、思考には靄がかかって正常な判断ができなくなっている。

女になって、十数年連れ添った陰茎は当然なくなってしまった。別に愛着がそこまであったわけではないが――いや、やっぱりあった。その喪失感は、当初は凄まじかった。

トイレをするにも一苦労。時々湧き上がる性欲を放出する場所も分からなくて、それがストレスになったこともあった。男はムラムラしたらしごいて白いの抜き出せば、それで解決するかも知れないけれど、竿のなくなった女の体には、熱くこみ上がる得体の知れないものを御す方法が分からなくて、最初はその欲求不満に戸惑った。

でも今では、じわじわと高まってゆく女の性感が癖になるくらいに好きだ。まして、改めてあの竿を欲しいなどとも考えない。

ゆっくりと、じっくりと、まるで冷水を弱火で加熱するかのように立ち込める性の熱は、その留まるところを知らずに、無限の情愛へと昇華していくかのよう。彼への愛はその性欲と共に高まって、もっともっと彼のことを好きになる。ずっと彼と一つになっていたいと思う。

そしてそのうちに、乳首だけでは我慢しきれなくなる。僕はマタニティワンピースをはだけると、男根のなくなった先に遠慮がちに割れる、小さな裂け目に手を伸ばす。すっかり濡れそぼったそこに潤滑油を塗る必要はなく、僕の華奢な指が待ってましたとばかりに吸い込まれる。

「――ぁうんっ！」

自分自身の指に突然、来寇を赦した敏感な秘部に、電撃が走ったみたいな快感が流れる。僕は思わず被虐的な嬌声を上げて体を跳ね上がらせると、愛液にまみれた右手人差し指をおずおずと視界の前に持って行った。

南向きの六畳間の和室の僕の部屋。ふかふかと敷かれたベッドの上に、障子を通して夜の東京のネオンライトが微かに差し込む。

そのうっすらとした明かりに、ぬめりを持ったえっちな粘液が垂れて、茫然としていると僕の唇の上につう――と伝った。

僕は淫魔に憑かれたかのように、その液体を舐める。それだけではむろん飽き足らず、人差し指を咥えて、彼の勃起した巨大な陰茎を想像しながら、前後に動かす。

酸味と仄かな苦さの混じった粘液に、夕飯のクリームシチューの甘みがカオスに入り混じった麻薬のような味で、僕の思考はどろどろに溶けていくのが分かる。それこそ、シチューよりも甘くとろやかに。

僕は涎でぬめった指を再び秘部へやると、今度は二本の指を持っていき、割れ目をなぞりながら膣口の入り口付近を繰り返し撫でて、女悦を貪り尽くした。鳴き声みたいな喘ぎが部屋中に響き渡り、部屋には僕しかいないのに、反響したその声がまるで自分ではない別の誰かの声に聞こえてきて、その繰り返しで更に僕は興奮する。

その間も僕は、ずっと彼のことを考えている――ときどきこうなる。彼のことがずっと頭にこびりついて離れなくなる。

彼のどこか頼りない少し高めの声。内勤続きで程よく荒れた武骨な指。細めながらも引き締まった、しかし最近はやや贅肉の付き始めた安心感のある胸板。そして、女体の興奮に勃起して、僕を犯さんばかりにそそり立つ太く長い肉棒――。

そういうときどきに、僕は激しい自慰に耽る。恥ずかしい嬌声も抑えられないような、夢の世界に片足を突っ込んだ情熱的なオナニーだ。

自分も忘れるほどに熱中したオナニーで、いつも完全に満足することはできず、僕は欲求不満のまま眠りに落ちる――。

「――大丈夫？」

切羽詰まったような声色に僕ははっと我に返らされた。

ふすまの向こうに電気がついていて、彼の影が見える。僕は視界が快楽の涙で霞んでしまっていて、その表情を読み取ることはできない。

慌ててはだけたスカートを直し、その場に女の子座りで取り繕うと、顔を真っ赤にして視線を逸らした。

乱れた髪が頬を伝う汗と涙に張り付いて、僕は高鳴ってやまない鼓動を御しえず、唇を噛んで黙り込む。

「ごめん、急に開けたりして。声が聞こえたから」

こんなことは初めてだった。今まで自慰がバレたこともないし、喘ぎ声は隣の彼の部屋には聞こえていないものだとばかり思っていた。でもそれはきっと運が良かっただけで、本当はばっちり聞こえていたのだ。

彼はたぶん、僕がオナニーをしていたなどとは思っていなくて、妊娠中の僕が体の不調で苦しんでいる可能性を考慮して来てくれたのだ。だから尚更、僕の中に気まずい感覚が込みあがる。さっきまでの桃色な気分が少しずつ霧散してゆく。

「だ、大丈夫、だから。別に何ともない」

「ちょっと見せてみな」

僕の気など知らずに、彼はつかつかと和室へ入ってくる。僕はやましいものを隠すかのように背を丸めて、紅潮した頬を悟られないようなるべく闇に顔を隠した。もちろん、焼け石に水だけれど。

彼は僕の身体をすっぽりと包み込むように抱くと、大きく膨らんだお腹に優しく手を当てる。そして頻繁に「大丈夫？」と確認し、今度は額に手を当てた。訝しげに熱があるなどと呟くが、当然それは彼の思い違いで、実際には性悦冷めやらずはしたなく自慰に没頭していただけだなどと、僕は自白できない。

彼の手際の良さに気圧されて、僕はあわあわと口をぱくつかせた。そうこうしているうちに僕の赤面は暗いながらも彼の目の前にさらされて、気が付けば僕は目を白黒とさせる。

ふと目が合って、彼はじっと僕の視線を射捉えた。

「……な、なに？」

恐る恐る訊くと、さっきまでとは打って変わって彼は呆けた様子だった。

「……い、いや。なんでも」

彼は背に回した手を外して、丁寧な仕草で僕を布団に寝かす。大学生くらいの頃まで、彼はもっと気が効かない人で苦労した覚えがある。でもいつの間にか、こんなに僕に対して優しくなっていた。

一向に、僕の気持ちに気付いてはくれないけれど。

――思えば、あの夜もこうだった。

手を出してきたのは彼の方だったけれど、それは僕が分かりやすくお膳立てしたからで、彼はいつも、僕のことを愛してくれるのは分かるけれど、踏み込んでくることはしない。それは言い換えれば、僕の気持ちを尊重してくれているということなのかも知れない。でも、少しは言葉にしにくい複雑な女の気持ちを、分かってほしい――なんて言うのはわがままだろうか？

立ち上がろうとする彼の服の裾を、ぎゅっと握った。おねだりするような上目遣いで、彼のことを見上げる。

「……薬とスポドリ、用意しようか？」

「……いや、体調は大丈夫」

僕は上体を起こして女の子座りになる。立ち上がった彼が見下ろす格好になって、自慰の熱に不完全に燃えた僕の心身は恥ずかしくて、やっぱり彼の顔を直視できなかった。

「体調は大丈夫だから、本当に」

「……寂しいの？」

……僕は小さく、こくりと頷いた。

――寂しい？　いや、少し違うかもしれない。でも彼は、僕の上っ面の気持ちを汲んでくれたのか、しゃがみこんで柔らかく抱擁してくれた。

彼の息が耳にかかる。前下がりボブを温かな息がくすぐって、僕は思わず猫撫で声を上げた。

「……かわいいな、やっぱ」

「うるさい」

「うるさいもんか」彼の腕の力が、詰るように少し強くなる。「まだ言い足りないよ。かわいい――好きだ」

恥ずかしい——けど、何度言われても嬉しくて胸がいっぱいになる言葉に、どれだけ救われることか。

込みあがってどろどろのぐちゃぐちゃに濁る性欲を、彼の愛の囁きが一瞬にして浄化して、僕を満たしてゆく。

最初はただ、バカバカしいと思った。だいたい僕は元男だし、彼の方もそう思っていたに違いない。ガワはかわいい女の子でも、中身が同性の腐れ縁では。

どうしてか、いつしか彼のことを好きになっていった。元々友人としては嫌いではなかったけれど、魔法にかかるみたいに、彼に恋心——その延長線上に女としての愛欲を感じるようになっていった。かわいいと言われることが恥ずかしさから、次第に嬉しさへと変わっていった。

僕たちは、相手を男として、女として、互いを認め合うようになっていった。

そして交際を始めた。

口づけを交わした。身体を重ねた。

——どちらからともなく、僕たちは唇を交差させる。最初は触れ合うだけの軽いキス。そして糸を引く涎を名残惜しむように、舌と舌を歯の上で交わらせる、濃厚なディープキスを嗜み、互いの愛を確かめ合う。

彼は僕の背に手を回し、分厚い胸板に女体を圧し潰すようにして強く抱擁する。その独占欲に僕の全てが吸収されるような気がして、僕は鼓動を高鳴らせた。彼のモノにされる、女の被虐心。

そして小一時間、そのままお互いの唇の感触を堪能する。キスをしては強くハグしあい、再びキスをする。その繰り返しの後に、彼が僕を優しく押し倒して、僕もまたされるがままになる。

「我慢してた」

彼は短いセンテンスで懺悔する。

「必要ないのに」

「だって、妊娠してるお前の方が大変だろうから」

「僕だって寂しかったのに」

「でも、心配だから」

「ありがとう」

「本当なら代わってやりたいけれど……」

彼の無意味な仮定に、僕はくすりと喉を鳴らした。

僕は生まれながらの女ではない。性別は確かに変わったけれど、趣味嗜好は男の頃とそんなに変わっている自覚もない。

かわいらしい女の子の顔に、最初は少しラッキーとも思ったけれど、生理はつらいし体力はないし、社会には女だというだけで立場を下に見てくる人も多い。純粋な女ではないから、色々な面で苦労したところもある（高校の卒業はごたごたのせいでギリギリだった）。正直、男のまま大人になれたら——そう考えたことも多々ある。

それでも、僕は女になれて——彼と結ばれて、本当に幸せだったと思っている。

彼はまだ、僕が女になったことを憐れんでいるのだろうか？　恋人になって、夫婦にまでなって？　……笑わせてくれる。

「絶対に代わってなんかやるもんか」

その言葉に彼が目を丸くするのが、心底おかしかった。

「今の僕が幸せだよ。お前と結婚できて——子供ができて。頼まれても、代わってやらない」

「……」

彼は返答の代わりに、押し倒された状態の僕を地べたに縛り付けるようにして、今夜一番深く長くて、激しいディープキスをした。歯の一本いっぽんをなぞるように、僕の口内を犯すかのように。そして彼の唾液を僕の舌の上に零して、僕の唾液を強引に吸い上げて。僕は目を蕩けさせ、甲高い喘ぎ声で鳴きながら、彼のされるがままになった。

顔を上げた彼の顔は獰猛な獣のようで、僕は本能的にこれから自分がめちゃくちゃにされる——なんて妄想を思い描いて、その被虐に全身をわななかせた。

「愛してる」

「……僕も」

彼は強引に力を込めて、柔らかい生地のレースカートをめくりあげ、膨らんだお腹までを晒しだす。

涙で潤んだ目で精一杯に彼のことを見つめる。何をされても、僕は嬉しいよと言葉にはせずに。彼は苦笑いをした後に、一言「かわいい」と呟いて、僕の両脚を無理やり開いて、まんぐり返しの姿勢を強要する。

「ひゃ……っ！」

僕は顔から火が出たみたいに、真っ赤になるのに気が付いていた。あまりに恥ずかしくて、この羞恥心のやり場もなく、思わず頭の後ろの掛布団を強く握りしめる。しかしそんな健気な姿すら、彼にとっては扇情的に男を煽る淫魔のように見えたのだろう。彼の表情は怖いくらいに狼に歪んで、口呼吸で息を荒げて、胸と大きなお腹で見えない僕の秘部に手を伸ばした。

「そこ……っ！」

「うわ……びしょびしょ」

「やめ――はずかし……」

僕はせめて羞恥で胸の内を叩きつける鼓動を抑えようと、顔を横に向けて目を閉じた。それでも全身に疼く熱は引かないし、滾る情欲は留まるところを知らない。

彼は僕の陰裂を武骨な日本の指で開き、自身の目に晒した。

逸らしたはずの視線が、再び彼の顔に吸い込まれる――彼が僕に対する嗜虐心を満たすのと同じように、僕もまた彼に恥辱に染められることを望んでいる。

その獰猛な瞳に、たちまちメロメロに堕ちる。

無言で、彼は僕の秘部に顔を近づける。そして敏感な部位をしゃぶり尽くすかのように舌を這わせ、上下の唇で食む。

「ひぅっ……そこ――っ！」

「なあ――挿れられるかな、これ……」

「ほえ？」

間抜け面晒して阿呆みたいな声で聞き返す。快感に彼の声には靄がかかって、それ以外のことはもうどうでもよくなる。

女に性欲がないなんて、嘘だ。性欲に圧し潰されて、全身がそれに塗り替えられる。

えっちなことしか考えられない、獣に変えさせられる。

彼が敏感な部位に舌を這わすたび、僕の身体が跳ねていやいやと首を振る。閉じた瞳から快楽の涙が零れて、開いたままの口から粘り気を持った涎が滴り、マタニティウェアの首元をてらてらと彩る。

ひとしきり責め立てた後、彼は顔を秘部から離して、手早くズボンを脱いだ。

衣擦れの音が聞こえて、僕は期待にわなき、のっそりと顔を上げる。相変わらず、視界は湿度にまみれている。しかし、隆々とそそり立って女を貫かんと血を滾らせる突起は、しっかりと認めることができた。

それが〝私〟を貫く感覚を、幾度となくフラッシュバックさせる――初めて彼と交わって、処女喪失を経験した高校生の時。何度も肌を重ねた学生時代、そしてようやく懐胎を成した旅行の夜――。

それは僕をダメにしてしまうモノだ。僕の中に入り込んだそれは、好き勝手に僕を蹂躙し、僕の中の人格までも作り変えてしまう。

ただ女悦に喘ぐ、メスにしてしまう――そんな感覚が好きだ。

それは女でなければ絶対に味わえなかった被支配感、愛される悦び。

自分では決してコントロールできないせり上がる感情を想起して、僕は慣れることなく喜びに打ち震える。

またこれを、挿れてもらえる――女の中に、彼の男の部分を受け入れる。

「――ひあぁっ……！」

待ってましたとばかりに、歓喜の声で鳴く。

今にも泣きそうな、しかしどう聞いても嬉しそうな、女が張り裂ける音。それはまさしく雄である彼が雌である僕の全てを支配したことを実感した、感動のサインである。

「痛くない？」と彼は決まって僕を心配する。

僕は大きく確かに頷いて、へにゃりと笑った。

「……動いて」

汗で髪が貼りつく。

彼はいつもよりのっそりと、緩慢な仕草で、一度挿入した肉棒を引き抜いた。

彼が僕の身体を、ひいては僕の中に宿った新たな生命を気遣ってくれているのが肌身に染み



るが、そのせいで僕の昂った性感は余計に高めさせられ、焦らされた身体が余計に加熱する。
怒張が引き抜かれて、絡まったひだに粘液がまとわりあい、それが擦れる感覚で震える。再び突き刺されて、お腹の奥底がずしりと響く感覚に鳴き喚く。
「……きもちい」
「……うん」
お互いに言葉は最小限に、しかししっかりと快楽を、愛を、確かめ合って。
ナメクジのようにどろどろに溶け合う混濁したセックスに興じる。
それは僕が身重だからこその、特別なセックスであった。いつもならもっと激しく、お互いに貪り合うような獣のセックスであった。しかし、二人が液体のように混じり合うような、沼の底に堕ちてゆくようなセックスも悪くはない。
彼も次第に喘ぎが激しくなってゆく。
だらしなく漏れる吐息交じりの汚い声に、彼が僕の身体で感じてくれていることを思って嬉しくなる。月並みな言葉だが、彼が僕と同じ気持ちを共有してくれているのが堪らなくなるのだ。
「おれ、っ、もうイキたい……」
「……ん、いいよ」
「でも動くと、お前の体……」
「……」
これぱかりはいいよとも言えず、僕はのっそりと起き上がって、だらしなく相好を崩した。
熱を持て余した体が未だ疼いていて、突起を抜かれた陰裂にわずかな寂しさを覚えてひくっと震える。
僕は息を荒げる彼の耳元で、妖艶に囁きかけた。
「手で抜いてあげる」
「……うん」
未だ衰えを知らず、じわりと熱を持った彼の怒張を、華奢な手のひらで包み込む。
彼の体温を肌身に感じながら、弱いところを重点的に、上下にしごいてゆく。彼が猿のように情けない声で喘ぐのが面白くて、かわいらしくて、口元が緩む。
今でもこんな強烈で凶悪なものが、自分にもかつてはついていたことを思うと、複雑な気持ちになる。もう陰茎が勃起する感覚も、それによって得る性的興奮も快感も思い出せなくて、平坦になって小さな穴が一つ空いた（彼を受け入れるための――）今の僕の身体は寂しくもあり、同時に、彼のための身体なのだと実感する。
右手を涎で湿らせて、彼の隆起を激しく擦りたてる。彼は子供みたいに高い声を上げながら僕の手の中で踊りよがり、性悦に乱れる。そして白くてどろどろのマグマを撒き散らし、僕の手の中で溢れて膝上を汚した。彼は息を乱してくったりと膝を突く。
無邪気に眉をしかめて、くんくんと犬みたいに、久しぶりに彼の精を嗅いでみた。
頭がくらっとするような濃厚な臭さに、僕は乾いた笑い声を零した。
「きもちよかった？」
彼はうんうんと、大仰に頷いた。

＊　＊　＊

翌朝も、彼は普通に出勤だ。
僕は彼が起きるより先に目が覚めたが、下半身裸のだらしない格好で抱き合った体勢でそのまま眠りに落ちたため、彼の力強い抱擁を振りほどくのが億劫で、暫くそのままになっていた。
朝食とお弁当を作れないのは彼のせいだし、間に合わなそうならコンビニのサンドイッチと焼肉弁当で我慢してもらおう。
そんなこんなでぼんやりと彼の寝顔を眺めている。
安らかで、規則的な寝息を立てて眠る彼の顔は、その面影は本当に小学校時代から何一つ変わらない。社会人になってから、目尻のしわとくまが増えた。こうして一緒に寝るようになって、彼は寝癖が物凄いという発見もしたが、これはもし僕が男のままだったら知りえなかった

情報かも知れないと思うと、数奇なものである。

目が覚めて三十分くらい経った頃に、彼がゆっくりと目を覚ました。

「……おはよう」

「おはよう」と僕は笑った。

「今起きたの？」

「さっき」

「よく眠れた？」

僕は頷いた。彼のふにゃふにゃとした声色が愛らしい。

「体調は？」

「大丈夫だよ」

腹部に軽い衝撃が走る。また、お腹の子が蹴ったのだと分かって、僕はじわりと多幸感が湧き出てくる。

にやにやと口元を綻ばせていると、彼は不服そうに唇を尖らせて「何がおかしいんだよ」と。

「や、別に？」

「そうだ、赤ちゃんの名前のことだけど……」

そういえば、前にそんな話をしていた。この前の検査で、生まれてくる子の性別が女の子だと分かったのだ。

「決めたの？」

「いや」

「なんだよ」

「……お前、最近本当によく笑うようになったな」

そう言って、最近あまり笑わなかった彼が久しぶりにほっこりと表情を崩したのを見て、僕もまた穏やかな気持ちになる。

お前は久々に笑ったな、と。

「ずっと苦しそうなお前を見て、やっぱりあの時お前は男に戻る道を選択すべきだったのかなって、悩んでた」

「……何言ってるんだよ」

僕は僕の意志で、女のままでいることを望んだのだ。

女としての幸せを必ず掴んでやると——この人と共に、幸せな未来を掴んでやると。

きっと、お腹の中の子がその集大成の一つなのだろうな……と、僕はそう思っている。

「お前が決められないなら、もう僕がこの子の名前決めちゃうぞ」

「なに？」

そして、その子の誕生が、僕が母として、彼が父としてのスタートを切るきっかけになると信じて。

「——へえ、いい名前じゃん」

「だろ？」

僕はにやりとしたり顔を作った。

最近僕がよく笑うようになったのは、本当に幸せになったからだと思う。

僕たちは、布団の中に隠れて、軽く朝のあいさつ代わりのキスを交わすと、ゆったりと起き上がった。

まだ出勤の時間には間に合いそうだから、朝食と愛妻弁当をしたためてやらないと。







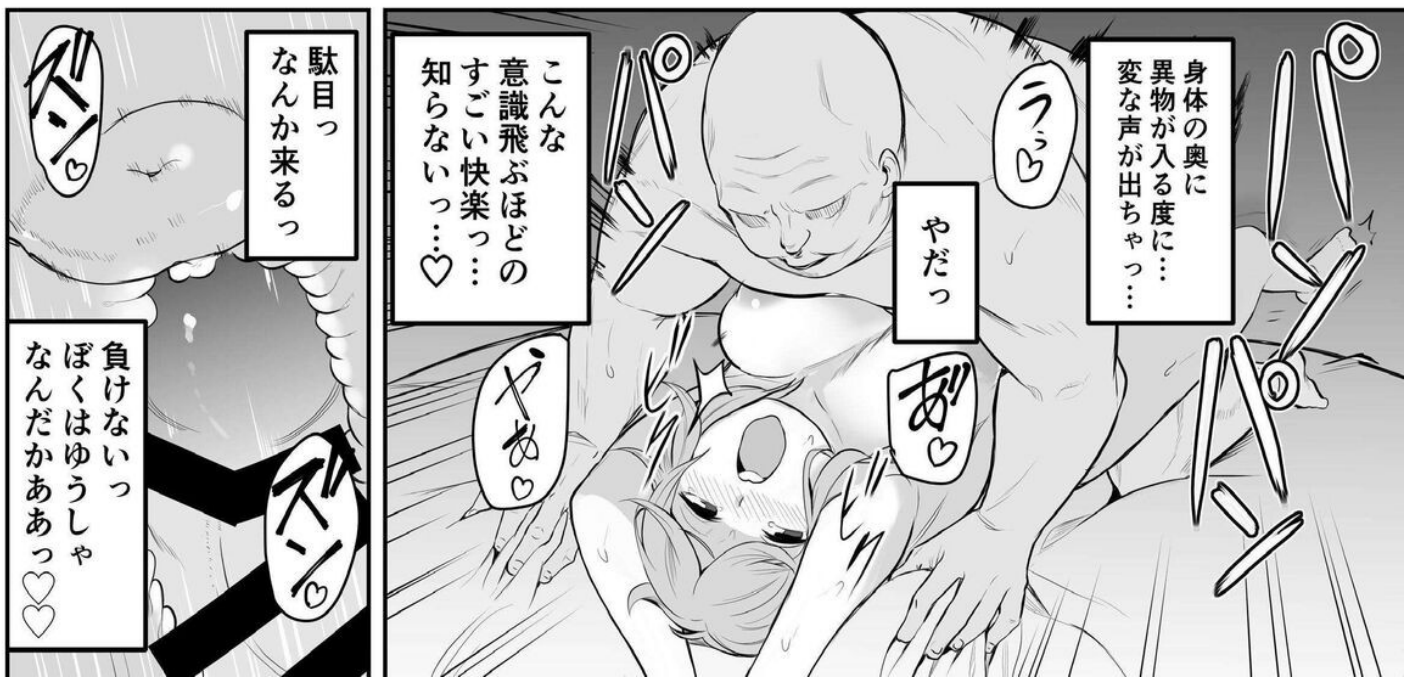
勇者は妊婦に転職する。
カップちゃん


大きな瞳
きめ細かな肌
とても
男だった
とは思えん
かすかに
雌の匂いも
させおる
才能も十分だな
っ……
くそっ…
この身体だと
力が出ないっ…
それに媚薬のせいか
頭がぼーっとする…
何が目的で
こんなこと
するんだっ…
まさかお前
魔王の……
魔王？
何を
言っておる


ワシは
希少なものは
集めないと
気が済まない
性質でな…
黄金竜の剥製
不老不死の宝珠
精霊の秘薬
そして
伝説の勇者の血を
継ぐお前……


だが男なんて
飼って鑑賞しても
つまらんだろ？
それに…
女なら
子供も
孕ませられる
!!


伝説の勇者の
血をひく子供なんて
ワシに相応しいだろ…？
なっ…
や……
やめっ……
ズン
おぉっ♡
え……？
何…起き…
あっ？
？
身体全体に
甘い衝撃が
駆け
ビクッ
おっ♡


身体の奥に
異物が入る度に…
変な声が出ちゃっ…
うっ♡
やだっ
あ♡
やめ♡
こんな
意識飛ぶほどの
すごい快楽っ…
知らないっ…♡
駄目っ
なんか来るっ
ズン♡
ズン♡
負けないっ
ぼくはゆうしゃ
なんだかああっ♡♡

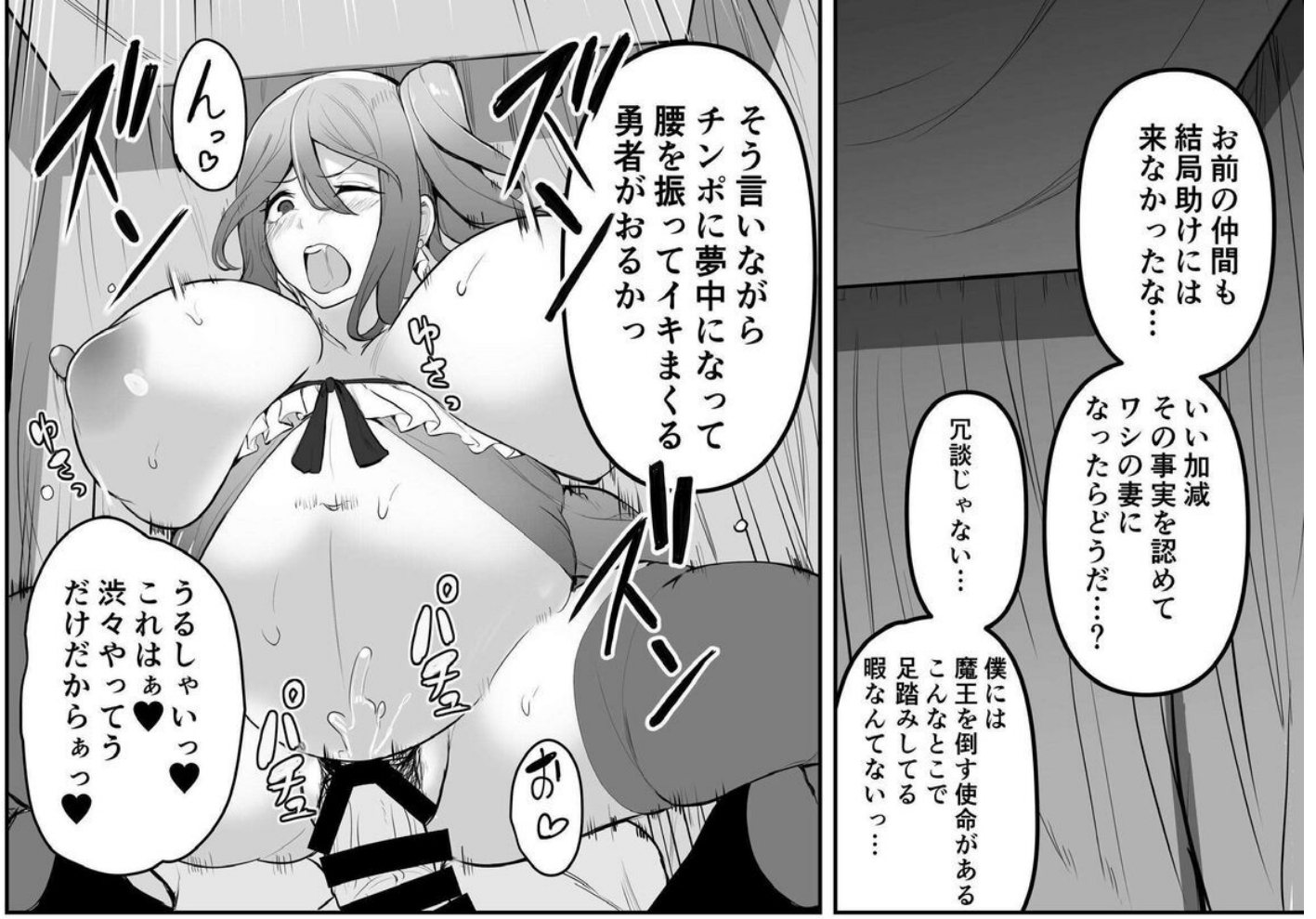

媚薬があるとはいえ
初体験でここまで
イキ狂うとは…
はーん
今後の情事が
楽しみじゃ…
はーん


それから
この男と毎晩
夜伽の相手を
させられた
時には恥辱を
受けるような事
までさせられて…
ご主人様…
どうかぼ…
フィリスの
おマンコに
いつものように
こってり受精を
してください…
にゃん…♡
あひっっ…とう
ございました
にゃあ♡…
僕はひたすら
仲間の助けが来る事を
祈るしかなかった……
パン
パン
パン
パン
あっ♡
やめ♡
おっ♡
うっ♡
ドロォ…


そして
三年の月日が
流れ……
くくく…随分と
ワシ好みの身体に
なってきたじゃあないか
もう誰もが
お前の事を娼婦
としか思うまい…
おわっ
っ……
どうとでも
言え……
ぶるんっ
ぶるっ
むちっ♡


こんな身体にされた上この男の子供を身籠ってしまったが…
孕んで尚雌のフェロモンが濃く臭ってきておる…
くく…勃起が止まらんわい
ドキ
変な事いうなっ…ボクは男なんだぞっ…
ドキ
僕は信じてる…いつかきっと助けが来ることを…


こんなたわわな乳房で誘惑して男とは笑わせる
ほらお前の乳首もワシに授乳したくてひくひくしておるぞ
じゅぱ
じゅる
ひゃああっ!?
ビクッ
あ♥
じゅぱ
すうなあっボクちくび弱いのにっ
ボクの母乳また出ちゃっ…
ぱっ
ぷるっ♥
やめおっミルクでるからぁっ
あひ♥
ふあああああっ♥あひっ♥♥ううううううっ♥


お前の仲間も
結局助けには
来なかったな…
いい加減
その事実を認めて
ワシの妻に
なったらどうだ…？
冗談じゃない…
僕には
魔王を倒す使命がある
こんなとこで
足踏みしてる
暇なんてないっ…
そう言いながら
チンポに夢中になって
腰を振ってイキまくる
勇者がおるかっ
んっ♡
ズン
ズン
ゆさっ
ゆさっ
パチュ
パチュ
お♡
うるしゃいっ♥
これはぁ♥
渋々やってう
だけだからぁっ♥


素直じゃない
ところも
可愛いのう
愛しておるぞ
フィリス
ふぇっ？
違う
カアア
ううう


くくっ
照れおる
違う
僕は勇者なんだぁ♥
あっ♥
チンポなんかに
負けるわけ
ないっ♥
ズン
ずぅ♥
ズン
こんな人
好きになる
わけないっ♥♥


ほらっ出すぞ
フィリス
ぴゃっ
あっ♡
ドポッ♡
ぁぁぁっ♡
あっ♡


お前の使命は
魔王を倒すこと
ではなく
子を孕み産むことだ
ゆめゆめ
忘れるでないぞ
んちゅ♡
じゅる
ぎゅっ
あ…♡
ぐぷぃ♡

あとがき

・温野りょく @UnoRyoku

温野りょくです。
ボテ腹は好きではあったものの、今まで描いたことがありませんでした。
難しいかなと思っていたのですが、意外と描くのが楽しいことに気づけたので、今回の合同誌は良い機会となりました。この度はお誘いいただきありがとうございました。

・カップちゃん @The_cupchans

素晴らしい企画にお誘いいただきありがとうございました！
今回の作品は、描きたいけど普段描かないものを詰め合わせて描きました。
おっぱいは相変わらずですが。楽しんでいただければ幸いです。

・くずほし

人外化合同に引き続き参加させていただきました。てんさんの周りには個性的かつ尖った文章やイラストを書かれる方が大勢集まるので、今回も他の方の作品に触れるのを楽しみにしてまいりました(笑)。

・来宮悠里 @yuris_yu1129

今回も参加させていただきました。楽しんでいただければ幸いです。

・このざま @konozma

TS娘のボテ腹合同、その言葉に悦び叫び真っ先に駆けつけ気が付けば書いていた、とにもかくにもこのような素敵な合同誌が出来上がったのは大変喜ばしい事です、TS娘のボテ腹は一般性癖。いいね。

・新川豊一 @shinkawato
初めまして、新川と申します。
大変好きなテーマなのでお声がけ頂きとても嬉しいです。
凌辱なので妊娠＝ある種のゴールのような負の面ばかりになりましたが、
幸せなボテ腹エッチも好きで迷いました。

・ドブロッキィ @doburocky
この度はTSF合同お誘いいただきありがとうございました。ドブロッキィと申します。４P漫画を描いたのは初めて＆ブランクが結構あったので予想より遥かに時間がかかってしまいました。TS良いですよねTS。もっと広がれTS。僕の漫画の登場人物はどっかの小説の誰かに似ているような気がしますが、あくまで漫画オリジナルキャラなので御座います。それでは皆様おつかれさまでした。

・ぬくいるすす @lss_rt
おっぱいよりもおっきくなったお腹のナカで、自分にはもうない息子と息子（娘？）を一足先にご対面させてあげるというのも乙なものだなぁ……と思いました。ありがとうございました。

・ねおしの @neosino
身体変化後の孕ませはもう戻れない感じが強くて素敵ですね。今まであまり描けていなかったジャンルですが、その魅力を知る事が出来て良かったです。

・み皮 @mi_kawa
趣味成分すこし多めでやりました。ＴＳ娘にひどいことしないで。

編集後記

合同誌の第二弾は、TSF と孕ませをコンセプトにした合同誌となりました。性癖を混ぜこぜにするとはたして……と思いながら企画しましたが、素晴らしい作品たちをご寄稿いただきました。作品ごとに結末も大きく異なり、様々な楽しみ方ができるかと思います。

最後にご参加いただいた作家さん方、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

伊巻てん

奥付

ＴＳＦ孕ませ合同誌

発行日	2021 年 5 月 4 日（初版） 2021 年 7 月 3 日（DL 版／第 2 版）	
発行者	伊巻てん（サークル：Tempest） Mail：contact@tempestylo.com	
表紙	温野りょく	
執筆者 （五十音順）	伊巻てん	新川豊一
	温野りょく	ドブロッキィ
	カップちゃん	ぬくいるすす
	くずほし	ねおしの
	来宮悠里	み皮
	このざま	
印刷所	ねこのしっぽ	

※18 歳未満の購入閲覧、無断転載・複製、
ネットオークション等への出品は禁止致します